
真・恋姫無双 ～ある戦場医のお話～

こしあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双

～ある戦場医のお話～

【Nコード】

N75830

【作者名】

こしあん

【あらすじ】

現代の戦場を渡り歩いていた一人の戦場医が恋姫無双の世界へタイムスリップ？彼はこの乱世で何を思い、何をしていくのか……

この小説に医療シーンの期待はしないでください。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

至らない点も多々あると思いますが、よろしく願います。

プロローグ

青年は今の状況に呆然と立ち尽くしていた。

「……どうよ……」

蒼天は高く澄み渡り、見渡す限りのただっ広い荒野。

映画か何かで見ると見えないような、一般的日本人には旅行にでも行かない限り見ることのできない光景。

だがしかし、彼は少々違っていた。

まあそれは一先ず置いておいて、くるくると辺りを見渡してみる。

地平線の彼方すら見える、そんな大地。

「確か自分のテントで寝てたはずなんだけどもなあ」

ポリポリと頭を掻きながらそう言ってみるが、現状が変わるわけではなく、

ふう、と面倒くさそうに溜息をはいたところで彼は自分の近くに緑の大きなシヨルダーバッグが落ちていのに気づく。

「……何でこんなところにあるんだ」

先程から疑問形の言葉を何度も吐くが、答える者など勿論、誰もいない。

ジリジリと、照り尽くす太陽が恨めしい。

そしてツンと鼻につく嗅ぎ慣れた鉄の匂い。

「やっぱりここも？……ってですよ、俺の仕事場なわけだもんね」
「
今まで考えてた疑問も置いて、彼は彼の「商売道具」を持って立ち上がる。
今やるべきこと、自分がするべきことはただ一つなのだから。

「さつとと、そんじゃあ今日も元気に……治していきますか？」
ポツンと見える黄色の布か旗印。
そちら目掛けて彼は走って行った。

「俺の患者は何処にいますかね？」
彼がついたそこは戦場だった。
それにしてもマシンガンや大砲の音がまったく聞こえないが、金属と金属がぶつかり合う音が、ヒトの叫び声が、そして何より特有のピリピリとした空気が、彼にここが戦場であることを伝えていた。
青年がそんなことを感じていると、

「とりあえずここから離れるぞ？」
不意に後ろから声が聞こえた。
振り返って見てみると、数人の男がいるのが見える。

ノッポとデブとチビという妙にバランスの良い三人組だ。

「あっあやしい奴なんだな〜」

どうやら向こうもこちらに気付いたらしく、

そうやって言うと、デブはチビを背負いながらぼろくさい剣を構える。

後ろに背負われているチビは何やら小さく呻き声を出している。

「武器は鎧の付いた蛮刀だけ？いつの時代のゲリラだよ」

銃万歳の今の世の中で蛮刀だけとかありえないだろ、と思いつつ青年がそう言うと、彼等は一瞬、ポカ〜んという表情をしてからノッポが、

「何分けのわかんないこと言ってんだこいつ、

頭おかしいじゃねーか。

くそ、急ぐぞ早くしねーとチビが！

……おい兄ちゃん、そこをどきな。邪魔するなら容赦しねーぞ」

「いてえ〜よお〜兄貴イ〜」

とノッポは言い、チビは悲痛な声を出す。

どうやらチビはケガをしているらしく、右脚から血が滴るのがみえる。

それをみて青年は……笑った。

「怪我人発見つと、なかなかナイスな怪我だな」

「だからなんなんだよお前は？」

「んっ、俺か？……俺は通りすがりの戦場医だ！

そうだな俺のことは……先生と呼べ？」

主人公たる者たちに少しだけ関わってきた彼ら。

そんな彼らは奇跡をみる。

そしてここに乱世を駆け抜けた一人の戦場医の物語が始まった……

…。

……… 本人はいまだに自分に何が起こったのか気付いていないが。

プロローグ（後書き）

この小説は「うしおなとら様」のアイデアをもとに書かせて頂きました。

多大な感謝を込めてお送りします。

これからもがんばるのでよろしくお願いします。

第一話（前書き）

駄文ですが、お願いします。

第一話

主人公 s i d e .

「あんだ、医者なのか？」

とノツポが目を輝かせながら聞いてくる。
どうやら俺が医者だ、と言ったのが 渡りに船 だっようだ。

デブの方も同じように目を輝かせている。

「ああ、まあそうだ。

??ちよつとそのチビを見せてくれ。」?

「へっへい、分かりました先生! ??

?? ?おい、はやくみせろ」

「わ分かつたんだな」

俺が指示するとふたりはいそいそとチビを俺に見せてきた。

……しかし、早速先生と呼ぶとはなかなか好感が持てるな。

まあそれはさておいて、

この地での最初の患者だ。

どんなもんだろうか。

さてと、これは、

「うん。」

「どうなんですか？先生？」

右太腿に切創か……。深いが、縫うほどではないな。

なら、止血してテーピングで自然治癒を待つのが妥当だな。
んっ、まてよ、

「もしかして、お前らの見たいな錆びた剣で斬られたんじゃないよな？」

「いえ、相手は官軍だったので俺達みてーな汚い剣じゃあなく、綺麗な剣でした。」

「それに、高そうだったんだな」
わ

デブよ、そんなことまで聞いてない。

でも、なんにせよこれで破傷風の心配はないな。

まあ血を絞り出して、洗っとけばいいだろう。

「おい、ちょっつと痛いけど我慢しろよ」

「えっ、ヒヤア！」

俺は思い切り血を絞り出す。

チビは痛そうに顔を歪めているが、気にしないでおう。

それよりも、

「お前ら、ボケっと思ってるだけならこの近くの川からでいいから出来るだけきれいな水を持ってこい!!」

「はっはいッ、分かりましたー(だな)」

そうして二人は走っていった。

全くここは戦場だぞ、できることを自分でみつけてやれってんだ。

ぼっとしている暇なんてないぞ。

とりあえず二人を待ってなんかいれないから鞆の中の水で洗うか。

これであとは止血帯で止血して、テーピングをはって、包帯を巻付ければ……………。

よしっ、治療完了。

出血が結構多かったから、鉄分のサプリメントも飲ましておくか。

俺は鞆の中をあさり、中にあるサプリメントを取り出す。

ほんと、便利だな。

「すげえ、血も止まったし、もう全然痛くねーや」

そうしたら、チビは元気を取り戻した様子で、俺に羨望の眼差しを

向けてくる。

よせや、照れるじゃねーか。

「ああ、あと三十分おきに帯をちよつとゆるめるよ。
?? それに、二三日は安静にしておけよ。そうすればすぐに走れるよつになるからな。」

「ありがとうございます！先生。」

そんなこんなしてるうちに、水を取りに行かせた二人が帰ってきたようだ。

なんか、木の桶に水を汲んでるがどこにあつたんだよ、それ。

まあいいや、とりあえず傷口洗うのには問題ないだろ。

「先生！本当にありがとうございます。」

「まあ、そんなに畏まりなさんな。
?ちよつと治したただけだ。」

「で、でも、助かったんだな。」

口々にお礼を言うてくるが、そんな大層なことをした分けじゃない。

ところでこいつ等、なんも統一感なく、ボロつちい服着てるが何処の軍なんだ？

なにか、むかしの着物を改造したような服に、頭には黄色のはちまきをしている。

いまどきゲリラでも着てないぞこんなボロい服。

ここが何処かわかるかもしれないし、聞いてみますか、

「お前らは一体何処の軍なんだ？」

するとノツポが、

「あつ、俺たちは黄巾党って言います」

……………ハア？

今こいつなんて言った？

黄巾党？あれだよな、

蒼天已に死す、とかつていう人達だよな？

いつの時代の人ですか！

どういうこと？

もしかして俺、三国志の時代に来たのか？

そんな感じにトリップしてると、それに気づいたノツポが話しかけてきた、

「あのぉー、どうかしましたか？」

「っ？、なんでもない。」

黄巾党ってあれだよな、漢王朝に反抗してる黄色いヒト達だろ？」

僅かな期待を持って聞いてみるが、

「はいッ、その黄巾党です。」

その期待は簡単に崩された。

ってことはやっぱりここは後漢末期の中国なのか……。

でも、一体どうしてアフリカにいたはずの俺がこんな場所も、時代も違う所にいるんだ？

……………分かんねっ。

頭上の太陽が刺すような日を送ってくる。

俺がとりとめとない思考をしていると、そんなことはおかまいなしでチビが、

「先生、よかつたらでいいんですが、まだあっちの砦にいる、怪我人も見てもらえませんか？」

「みつ診てほしいんだな」

「お願いしますよ先生？」

チビが言ったのを皮切りに、残りの二人も俺に懇願してくる。

ハァ、俺は何を考えてんだか。

助けを求める奴がいたら黙って手を差し伸べる、それが医者じゃねーか。

今がいつで、ここが何処かも関係ない、俺は俺のやるべきことをやるだけだ。

柄にもなく深く考えちまったな。

じゃねーとあいつ等に向ける顔がないな……………。

よしッ、

「案内しろ。」

「診てもらえるんですか？

「ああ、だから……………急ぐぞ？」

「はいっ、こっちです。」

そして、いまだ戦火の中にある砦へと走り出した青年。

彼は己のやるべきことを為すため、立ち止まらない。

彼は戦場医なのだから……。

第一話（後書き）

主人公の名前が出てこない、
なんかいい案ありませんか？

案があつたら、感想をお願いします。

第二話（前書き）

連投です。

よろしくお願ひします？

第二話

主人公 s i d e

俺が砦に着くとそこは地獄絵図だった。

あちこちで砦の壁にもたれ掛かっている怪我人の呻き声が聞こえる。

まあ、もつとひどい戦場を何度も見てきたけどな。

此処だけでざっと………百人くらいか、
思ったよりも少ない。

「おい、此処以外にも怪我人はいるのか？」

俺がチビに尋ねると、

「いえ、此処にいるのが全部です。あとは………戦場に打ち捨てられたままのやつがいるくらいです。」

「そうか、そいつらも運び次第、此処に連れてきていってくれ。」

「はいっ」

そう言ってチビは周りに指示を出し始めた。

「さてと、なら俺も始めますか。」

人員は俺一人、機材はボロい野戦病院以下、なんとも燃えるシユチ

エーションだな。

では、最初っからとばしていきますか？

「ノツポは、今すぐに湯沸かしてこい！

そんで、デブは俺と一緒に来い？

もたもたすんなよ！」

「分かりました？」

俺が檄をとばして二人は動き出す。

戦闘開始だ。

「おい、デブ！

俺が患者に色で印を付けて行くから、同じ色の患者同士で固めとけ
」？

「了解だな」

といい俺は鞆の中にあつたペンでトレアージをしていく。

トレアージとは患者の症状を判定して、治療の優先順位を決めることだ。

これをしてないと、

死ななくてもいい患者を殺すことになるからな。

……よしっ、大体終わった。

これで全員の患者の右手首に、赤、黄色、緑、の印がついた。

赤は最優先治療群、

一刻もはやく治療をしなければ、生命の危険がある状態。

黄色は待機的治疗群、

今すぐ生命に関わることはないが早期に治療を必要があるもの。

緑は保留群、

軽度の怪我で早期に治療する必要がないもの。

上のように、治療の優先順位は赤 黄色 緑、の順になる。

今回は赤が九人、黄色が三十二人、緑が五十九人か……。

本当はもう一色あるんだけど今回はいなくてよかった。

しかし、デブのやつなかなか手際がいいな。

もうそれぞれまとめてあるじゃねーか。

「先生！湯、沸かしてきました？」

「おし、じゃあはじめるぞ」

「はい」

俺はノツポの持ってきた、湯で針を消毒する。

一人目は、

胸に裂傷か、深いし出血がひどい、見事に真一文字に切られてる。

縫合しますか。

俺が針を持つと、弱々しくも何する気だ、みたいな目で見てきた。

「簡単簡単、糸通して縫うだけだから」

そついうと青ざめて俺を見てくる。

「そんなにビビんなビビんな、じゃあ……………逝くぜい？」

「……………ん~~~~!!!!!!」

まともな麻酔もないし、めっちゃ痛いんだろう。

やってんのは俺だけ。

おい、ノツポにデブ顔引き攣ってんぞ。

何はともあれ、一人目は完了だな。

……………痛みのあまりすごい表情だが大丈夫だろ。

この調子でドンドン逝くぜ？

ノツポside

俺が汲んできた湯で先生は針を洗うと、一人目の怪我人を治療し始めた。

針を持っているが何をする気なんだろうか？

「簡単簡単、糸通して縫うだけだからな」

つつ???

今先生はなんて言った？

ヒトに針を通して縫うだつて？

そんなあぶねえことできんのか？

「そんなにビビんなビビんな、じゃあ……………逝くぜイ？」

先生……………漢字が違います。

どうやら怪我人も声になつてない悲鳴をあげている。

チビ、よかつたな。

おまえも下手したらああなっていたかもな。

静かになり、治療は終わつたらしい。

先生は満面の笑みだ。
怖いです……………。

あれは絶対に逆らったらダメだ。
気をつけよう。

怪我人を見ると、苦痛ですごい顔になっている。
……………「ご愁傷さま。」

でも、さっきまで出血してた傷口はきれいにふさがり、今では一滴
の血も出ていない。

ありえない、あんな治療があるなんて……………。
やっぱり先生はスゲーや！

まあ俺は治療して欲しくないけどな、

「おい、なにしてんだ、早く次いくぞ！」

おっと、しまった。
早くしねーと。

俺は先生の声で現実に戻ると、先生の方へ走って行った。

俺は俺のできることをやらねーとな。

~~~~~

暫くがたって、  
“全員”の治療が終わった。

もう日も沈み、官軍も攻撃をやめたようであたりから戦火の音は聞こえない。

たった一刻か二刻のあいだに、先生は百人全員と後から運ばれてきた奴らもだ。

それに驚くことに、ここに運ばれてきた奴の中に死者が誰もいねー。

どんな重傷のやつも先生は救っちゃまった。

治療している時の先生は凄まじかった。

俺たちにはできそうなことを適切に指示しながら、自分の手はものすげえ速さで動かして、怪我を治してた。

俺らには何してるか分んなかったけど、とにかくすげえことと、治療が痛いことはわかった。

今も先生は治療した怪我人を見て回っているが、みんなから痛かったと笑いながら文句を言われている。

なんか今が本当に戦をしているのか疑問に感じちまうな。

俺は今、先生に言われてお粥を作り怪我人たちに配っているが、誰も怪我をしているのに明るい顔している。

これも先生のお陰だな。

あつ、そう言えば先生は今日何も食わずで治療してたな。  
このお粥でももっていかねーとな。

そう思い俺はいまだみんなの中心にいる先生のもとへ走り出した。

## 第二話（後書き）

なんかいろいろと使ってみましたが、  
間違いがあれば指摘お願いします。

## 第三話（前書き）

連投ラストです！

ここからは少しペースを下げていきます。

## 第三話

主人公 s i d e

俺は今、中庭に並べられた怪我人たちを見て回っている。  
全員、経過も安定してるし大丈夫だな。

それにしても、こいつらは命の恩人たいしての感謝ってもんは持っていないか？

さつきから、治療が痛すぎるやら、笑顔が怖いやら、そんなんじあ女にもてないとか、好き勝手にいつてくる。

どう考えても、後ろ二つは関係ねエだろ？

まあいいや、これも元気な証拠ってやつだな。

それに、もう一回治療してやるうか？って笑顔で言ったら静かになったな。

そうしていたら、ノツポがこっちに走ってきた。

「先生！お粥ができたんで、よかったら喰ってください」

おっ、わざわざもってきてくれたんか、気がきくな。

おっ、味は薄いがなかなかうまいな。

さてと結局、ドンドン怪我人が増えていって二百人位治したんかな。こっちに来てから初の大仕事だったが腕は鈍ってなくて、よかった。でもこれからどうしようか？

こいつ等といてもいいが、こんだけ被害をうけたんだ、このまま戦えば多分やられちまうから巻き添えくうことになるな……ところで、こいつ等はこれからどうするつもりなんだ？

聞いてみるか、

「なあ、ノツポ。」

「なんですか先生？」

「お前等さこれから一体どうすんだ？  
こんだけ被害だしてこのまま戦うなんて無理だろ？」

俺がそう言つと、周りで騒いでいた奴らも静かになり、表情を少し暗くする。

そしてノツポは、バツの悪そうな顔になって、

「いや、もう降伏しちまおうかなって思っんですよ。」

っ？あまりにも軽くいうもんだからビビっちゃまったぞ。

「なんでだ？」

「まあ、俺たちは生活が苦しくても税金だけを持って行って、なんにも俺等を助けてくれない王朝に怒って起ち上がったんですよ。」

ノツポは遠くを見るような目で話す、

「でも、いま思うとそんなことでヒトを斬ってもいいんかなあー、って思うんです。」

それに今日、治療してくれてる先生をみて、俺等が傷つけた奴らも、こつやって誰かが必死で助けてんのかなー、って感じでなんかもうこれ以上ヒトを斬りたくなかったんです。

だからさっ、もう降伏しないか？みんな？」

「そつだよなあー」

「もう止めようぜ」

「先生に貰った命で、ヒトを殺したくないしな」

ノツポがそついうとあちこちで賛成の声があがる。

そこには降伏する暗さなんてない。

全く、嬉しいこと言ってくれるじゃねーか。

「俺も助けた命が、死んでくのも寝覚めがわるいしな。」

俺が言うと一瞬静かになり、みんなが一斉に笑い出した。

………なんでだ？

すると一人が、

「先生はどうすんだよ？」

と聞いてきた。

「そうだな、俺は、

この国のことなんもわかんないから、いろんな所を旅して、お前等みたいな馬鹿を助けながら、金でもためてくかな。」

彼が出した答えは、現代にいた頃に彼がしていたことと全く同じだった。

各地の戦場を渡り歩き、己の力を振るい人を救い、金を得る。

それが彼、「桐島 秀哉」の生き方だった。

俺もつくづく変わんないな。

と誰にも聞こえぬ声でつぶやいて、自嘲気味に笑つと、

「そりゃあいいいな！

俺等みたいな馬鹿を救ってくれよな、先生？」

と周りにはやし立ててきた。

それに合わせて笑いが起こり、またうるさくなる。

ふう、ほんとに馬鹿ばっかだな。

まあ馬鹿はきらいじゃないけどな。

「よっしゃああ、なら今日は俺たちの新たな門出を祝って、宴だあ  
くく？」

一人のごつい男がそう言っつて、酒瓶を持つ。

おいおいちょっと待て、お前等怪我人だろ。

それに、降伏すのに祝ってどうすんだよ？

俺は一層騒ぎ出すみんなをみてそう思う。

「すいませんね、先生。  
騒がしくて。」

そんな騒ぎの中ノッポが声かけて来る。

「別にいいぞ、良い仲間持つてんな。」

周りの騒ぎを横に俺たちは皆の隅ではなす。

「それよりも大丈夫なのか？」

「何がですか？」

「明日のことだよ。」

降伏したら、はい全員打ち首！なんてことはないよな？」

「そのことでしたら大丈夫ですよ。」

いま来てる官軍の大將はそんな人じゃ無いらしいですし」

「へえ、どんな奴なんだ？」

「なんでも、曹操っていう、陳留の太守ですよ。」

……………工？

曹操ってあの魏の霸王の曹操か？

まさかこんなところで三国志の英雄の名が聞けるとは……………うんっ  
、びっくりだな。」

「そっか、なら精々達者でやれよ。」

「はい、先生こそ！

?? ……………先生、俺の名は亘祇って言います。

先生の名も聞けませんか？」

「あつ、俺の名か？」

俺は、桐島だ。」

「桐島、ですか。」

変わった名ですね」

「……………つるせえ。」

生まれた時から決まってたんだ仕方ないだろ。

ふう、しばしの間沈黙が二人の間を流れる。

まあ、周りはつるさいけど。

「一杯…どうですか?」

「わるいな、酒はもう飲まねえって決めてんだ」

「そうですか……………」

亘祇は残念そうに言う。

そして思い出したように。

「そう言えば、報酬なんですけど、どうすればいいですか?」

と聞いてきた。

「ああー、なら食糧を持てるだけ貰えらるとありがたいのだが、いいか?」

「分かりました。」

もう明日降伏する俺達には必要無いですし。」

「なら、遠慮なく貰ってくな。」

これで旅の食糧は心配しなくてもいいな。

「じゃあ、俺はさつさと準備してお暇しますか。」

「もっとゆっくりしていても良いんじゃないんですか？」

「もう俺の仕事は終わって、報酬も貰った。

ここに残るりゆうがねえよ。」

「……分かりました。」

先生、ほんとにありがとございました。

お元気で。」

巨祇は寂しそうな顔で言い、頭を下げる。

「おう、じゃあな。」

こうして俺は、鞆にありったけの食糧と治療に使えそうなものをかき込んで、砦をあとにした。

後ろにまだ騒いでいる馬鹿どもの声を聞きながら。

「さて？これから何処へいこうかね？」

そして俺は先の見えない暗闇の中の道を進んでいった。

彼は行き先も決めず、思うがままに進むでいく。

彼はまだこの世界が彼の知る世界とは大きく違うことを知らない。

### 第三話（後書き）

名前は……まあスルーしてください。

何かオリキャラがでしたが、これより先出てくる予定はほぼありません。

次回からは原作キャラを出したいと思います。

## 第四話

(閑話)

(前書き)

今回はあの人のお話です。

## 第四話 (閑話)

曹操 side

我が名は曹孟徳。

誇り高き大陸の霸王となる者よ。

今日は漢王朝に命令されて、黄巾党の討伐に来ただけど……

……ほんと恨めしいわね。

力もないくせに権威だけ振りかざして、上から命令してくる。

ああむかつくわね。

まあ、こんな程度の賊すら諸侯の手を借りないと押さえ付けられないとなると、滅びるのも時間の問題ね。

そうなればすぐに群雄割拠の乱世がおとずれる。

そこで覇を唱えるためにも、ここで黄巾党を討って名をあげる必要があるわ。

それに、この前荒野で拾った ” 天の御遣い “ も有効活用しないとね。

そんな風に私が今後のことを考えていると、

「華琳様？」

と秋蘭……夏侯淵が声をかけて慌てたようすで天幕に入ってきた。

「あら、秋蘭そんなに慌ててどうしたの？」

何か賊に動きでもあったの？」

「はいっ、賊は皆の中へと追い詰めたのですが、あの〜、その〜……………？　？　？」

「何があったの？」

ちゃんと報告しなさい。」

秋蘭がこんなに困っているなんて、賊は何をしてきたのかしら？

「はっはい。え〜と、非常に申し上げにくいのですが、賊共は皆の中で……………」

宴をしているようです。」

ピクツ???

「へえ〜〜。」

それはこの曹孟徳への挑発と受け取っていいわよねえ？

秋蘭？」

なかなか面白いことしてくれるじゃない。戦の途中に宴？

そっちがその気なら、こっちは全力で潰してあげようじゃない。

「華琳様？　落ち着いてください。」

もしかしたら此方に攻めさせるための敵の罠かもしれません。」

「秋蘭、

貴方は本当にそう思っているの?」

「うっ!そっそれは……………」

まあそうでしょうね。

賊にそんなことを考える頭があるとはおもえないわ。

大方、眼の前の酒や食糧に我慢が出来なくなった、ってところでしよう。

「ふう、分かったわ。

じゃあ、秋蘭。

春蘭を呼んできてもらえるかしら?」

「はっ?」

秋蘭は返事し、春蘭を呼びに出ていった。

暫くして、

「華琳様?? お呼びですか。」

春蘭……………夏侯惇が天幕に入ってきた。

「よくきてくれたわ、春蘭。」

「どうやら賊は今、砦の中で宴をしているらしいの。」

「なっ？ 賊のクセに華琳様を侮辱するような真似をしょって。」

「なんて奴らだ。」

「そこで明日、秋蘭と一緒に砦を攻めて一気に落としてもらいたいの。」

「やってくれるかしら？」

「はっ？ その様な賊など我が剣で叩き切ってくれます。」

「ふふ、たのもしいわね。」

「期待してるわ。」

「はっ？ 任せてください？」

私は春蘭の近くまで歩み寄って、耳元で  
上手くやってくれたら、ご褒美をあげる。と囁く。

春蘭の顔が真っ赤になり、幸せそうな顔で、

「華琳様あア／＼／／／」

と言っ。

ふふ、相変わらずカワイイわね。

「あら、秋蘭。」

そんなに拗ねないで。  
貴方にもちゃんとあげるから」

それを聞くと、秋蘭も満足そうな顔になって、春蘭と二人で自分の  
天幕へと帰っていった。

明日が楽しみね。

さて、今日は春蘭と秋蘭で砦を攻めてもらってるのだけど、おかし  
いわね。

戦の音がまったく聞こえてこないわ。  
一体どうなってるの？

すると、

「失礼します？」

と一人の兵士が入ってきた。

「申しあげます？  
夏侯淵將軍より伝令で、曹操様に至急来てもらいたい、とのこと  
です。」

「っ？分かったわ。  
案内しなさい。」

「はっ？」

秋蘭が私を呼ぶなんて、なにがあったの？

まさか、春蘭の身に何かあったんじゃない？  
急いだほうがよさそうね。

私は急いで秋蘭の下へと向った。

着いて私に見えたものは、

砦の入口で、

泣きながら敵の大將らしき人物の胸倉を掴んでいる春蘭とそれをな  
だめようとする秋蘭だった。

一瞬どんな状況か理解できなかったけど、すぐにもちなおして、秋  
蘭に

「秋蘭、

何があったのかはもちろん説明してくれるわよね。」

と溢れる怒りを押さえて尋ねる。

どうやら、春蘭と秋蘭が砦を攻めようとしたら、それよりも先に敵  
が砦の門を開けて降伏してきたらしい。

そして、それによって手柄がなくなった春蘭が、

「お前等が、降伏したせいで華琳様のご褒美があア〜？」

……といった具合に相手に掴みかかり今に至るわけだ。

春蘭、

それじゃあただの八つ当たりよ？

少し感情的になりすぎね。

あとでたっぷりお仕置きしないとね

「春蘭、やめなさい。

みつともないわよ。」

「でも華琳様あア〜！」

「しつこいわよ。春蘭！」

あとでお仕置きしてあげるから、私の天幕に来なさい。」

「はっはい？」

私が言うと、春蘭は一転して笑顔になる。

全く、忙しい子ね。

「それで貴方は……巨祇、だったかしら。」

貴方達はどうして突然、降伏してきたの？  
昨日は宴をしてたようだけど。」

私は今だ胸元を押さえながら、ゴホゴホと咳込む男、巨祇に尋ねる。

「はっ、はい？」

俺たちはもう昨日の戦で、怪我人を多く出しちまって、これ以上戦えそうにありませんし、

それに……………」

「それにどうしたっていうの？」

巨祇は懐かしそうな目をしている。

「はい、もうこれ以上にヒトを斬りたくなっちゃったんです。」

??? 一体どういうこと。

こいつ等は賊じゃなかったの？

そう言えば、昨日の戦の途中でも、少し様子がおかしかった。

確か、途中から怪我人を砦の中に運ぶ込むようにしてたわね……………。

「貴方達、昨日の戦の途中から急に怪我人を砦の中に運び込んでいたけど何をしていたの？」

治療していたのにしても、こんな貧相な装備しかない賊共に医術の心得があるとは思えない。

「へっ、へい。」

砦の中で先生にみてもらっていました。」

「先生？」

貴方達の中に医者でも居るの？」

「いえ。違います違います。」

先生は俺たち見たいな賊なんかじゃありません。

先生は色々な所をまわって治療をしてる人です。」

わざわざ戦地まで来るなんて、  
変わり者もいたものね。

「そう。じゃあ取り敢えず怪我人達のいる場所に案内しなさい。」

私がそう言うと男は、こっちです。と言い砦へと入っていく。

それに続き、私と春蘭、秋蘭も砦へと入っていった。

「……………巨祇。」

「はい。なんでしょうか？」

「貴方のいう“先生”ってのは、何人いたの？」

「えっ？」

先生は一人しかいませんけど。」

皆へと入り、私達がそこで診たのは、大量の“治療された”怪我人  
たちだった。

「じゃあなに？」

これだけの怪我人を一人で治したっていうの？」

ざっとみただけでも、百五十人はいる。

これを一人で治したのなら、かなりの腕の医者ね。

「いえっ。

結構な数のやつが動けようになって、今ここにはいないんで、実際  
はもう少し多いですね。」

っ？……………前言撤回。

凄まじい腕の医者ね。

それにしてもそれ程の腕を持つ医者か……欲しいわね。

「その者は今ここにいるの？」

「先生は治療を終えて、もう去っちまいました。」

残念ね。なら、

「秋蘭！」

その医者について何者が調べなさい。」

「はっ？」

「華琳様？そのような怪しい者は我が軍に必要ありません。」

「春蘭、これは貴女の為でもあるのよ。」

貴女が怪我をした時に治せる者がいた方がいいでしょ？」

「華琳様あア？」

そんなに私の事を心配してくださるなんて………？」

春蘭は嬉しそうにしてる。

それは置いといて、

「さて、巨祇？」

貴方はその先生について他になにか知ってるの？」

「あとは、草むらの柄の服の上に、白い外套を羽織っていました。あまり見ない恰好ね。」

「他には……。名前が桐島っていうくらいですかね。」

成る程、まあ今回の賊討伐ではいい収穫があったわ。

すると、

「あのおく、曹操様？」

私達は一体どうなるのでしょうか？」

巨祇が不安そうな声で聞いてきた。

そうね……

「貴方達、もうヒトを斬りたくないんでしょう？」

「はい……。」「

「なら、今回は見逃してあげるから、さっさとどっかへ行きなさい。」

「えっ？いいんですか」

「ええ、どうせ貴方達が賊になったのも王朝のせいでしょ？」

それにいい情報も聞けたからいいわ。」

「っ？ありがとうございます？」

巨祇は深々と頭をさげて礼を言ってくる。

他のもの達も同じ様子だ。

「それなら、いつか私にその恩を返しにきなさい。」

「はい、必ずや？」

ふっ、いい返事ね。

じゃあここにはもう用は無い。

「春蘭、秋蘭！帰るわよ。」

「はっ？」

こうして私達は皆を後にした。

絶対に見つけてあげるから待ってなさい、桐島。

その頃……、

「へっくしゅん??」

あれ〜風邪でもひいたかなア?

こっちの世界にまだ慣れてないからな、体調管理には気をつけねえとな。

当の本人は自分が大変な人物に目をつけられたことに、全く気づかない。

「街ってどこにあるんだ?」

彼の旅は続く……

## 第四話

(閑話) (後書き)

口調あってますかね？

次回からいろんな原作キャラとの邂逅を書いてきたいと思います。

読んで頂きありがとうございます。

## 第五話（前書き）

キャラ崩壊の予感です。

## 第五話

秀哉 side

俺は今、荒野の中を歩いている。

あいつ等と別れて少し経つが、今だ街や村のひとつも見えてこねエ  
じゃねエか？

「こんなだったら、あいつ等に街の場所でも聞いとけばよかった  
な。」

まあ、今更言っても仕方無いが。

それにしてもどうしようか。

食糧はまだまだあるけど、ずっと野宿つてもキツイな。

誰かに道を聞くにしても周りには誰もいないし。

こつちの世界の地図なんてもってるはずがない。

……………こつなったら、奥の手を使うしかないな。

よっっ、

「どくちだ。」

そういつて、そこら辺で拾った木の枝を倒す。

「ん、こつちか。」

そして俺はその枝が倒れた方へと走り出す。

「どつなつてんのよ、これ。」

俺は辿り着いた森の中で呆然と眩く。

さっきより、状況は悪化してるな。

やっぱ、その辺の木じゃあダメだったか。

もっとちゃんとした杖とかでやるべきだった。

うん、まあ仕方無い。

「止まっても意味無いし取り敢えず歩いていってみますか。」

そして俺は森の中を歩き出す。

??side

私は今森の中を走っている。

ほんと最悪だわ。

袁紹に見切りをつけて、陳留の曹操に士官する為に旅に出ただけ  
ど、同行してた隊商が山賊に襲われるなんて、

そのせいでこんな森の中を走る羽目になった。

それにさっきは虫にも刺されるし……

「ほんと最悪ね？」

なんとか隙をみて逃げてきたのはいいけど、追っ手も来てるしこの  
まま逃げ切るのは正直キツイわね。

それでも立ち止まるわけにはいかず、私は森の中を走ってく。

「もう、なんでこんな事になってるのよ？」

そんな私の叫びは森の中に虚しく響くだけだった。

秀哉 side

さて、結構この森の中を歩いて来たけど、

いろんなものがあるな。この森。

さっきは猪にもあったし。

その前には、野犬にもあった。

どっちも軽く怪我をしたから、治してやったが。

あつ、でっかい蜂の巣もあったな。

やっぱ、人間の手が及んで無いから生態系が豊かなのか。

そんな感じに俺が自然の神秘に浸っていると、どっかからなにかの叫び声？みたいなのが聞こえてきた。

なんだ、今のは？今度は熊でも出てくんのか。

……それは流石に勘弁して欲しいな。

そんな事を思うと、こっちに向かってくる足音が聞こえる。

まじかぁ……………。

「もうこうなったら、熊でも虎でもなんでも来やがねってんだ！」

そういつて俺は身構えると、ガサカサと鳴り草むらから出て来たのは、

……………なんだ、ただの猫か。

よかったよかった。

じゃ、俺は行きますか。

俺が安心して去ろうとすると、

「なに、見なかったように完全に無視しようとしてんのよ？」

と猫——もとい猫耳少女が声をかけてきた。

猫耳 side

なんなのよこいつは？

私をみて安心したような顔をしたと思ったら、何事もなかったかのように無視してくるから、思わず声掛けちゃったじゃない。

そしたら、

「あのおく、どちらさんですかイ？」

と声をかけてきた。

「なんであんたみたいな男にそんなこと言わなきゃいけないのよ？」

ああっ、近寄らないで妊娠したらどうすんのよ。」

私がそういつてやったら、一気にめんどくさそうな顔になって、

「はいはい、そうですか。なら俺はどっか行きますかね。」

と言って今度こそ去ろうとする。

私もこんなのかまってる暇はなかったわ、急がなきゃ。

と、走り出そうとする。

「見つけたぞ？」

と不意に後ろから声をかけられる。

っ？追いつかれたわね。

それもこれも全部こいつのせいね。

本人はいまだになにも分かってない様子だけど。

「どうしてくれるのよ。」

あんたのせいで追いつかれたじゃない。」

「俺に言われても困るのだが？」

「これだから男は嫌なのよ。」

「……………」

ああっ、男なんかと話していたらなんだか息苦しくなってきたわ。

それになんだか体も熱いし……………

あれっ？視界も霞んできた……………

私は急にえらくなり、意識が朦朧として、体の態勢を崩し倒れそうになる。

すると男は今までの面倒くさそうな顔をいきなり、真剣な顔つきにかえて私を支えてきた。

？男のくせに私に触るなんて？

いつもの私ならそう言ってるのに今はそんな事すらできない。

どうしちゃったのかしら私？

すると男は真剣な顔で、

「おい、もしかして蜂に刺されたりしなかったか？」

「なんで、あんに……そんな事……言わなきゃなん、ないの？」

「いいから、いう事を聞け??」

「っ？、確かに、刺された、わ…よ。」

「どこをだ？」

「右腕、よ……。」

男の切羽詰った様子に気圧され、私はそう言った所で体がさらに熱くなるのを感じて意識を手放した。

秀哉 side

この猫耳はなんなんだ？

話しかけてみれば向こうの口から出るのは、罵詈雑言ばかり。

拳句のはてには追っ手に追いつかれたことまで全てを俺のせいにしてきた。

……………怒ってもいいよな。

流石に我慢も限界に達し、切れようとするど、

急に猫耳は態勢を崩した。

っ？俺は慌てて猫耳を支えて、状態を確認する。

症状は呼吸困難、血圧の上昇、意識の困憊が確認できる……………

それにここは森の中だ。

もしかして？！

俺が猫耳に確認すると、予想道理だった。

おそらく蜂に刺された事による、アナフィラキシーショックだ。

右腕を見ると言った通り小さいが傷跡があった。

すぐ死ぬ、なんて事は無ねエと思うが放っておくと危ないな。

今すぐ治療するか。

「おい、てめエら。さっきから無視してんじゃねえー？？」

猫耳を追ってきた？男達の一人が言う。

ハア？こいつ等はなにを言ってんだ。

今がどんな状況かもわかんないのか？

「おい、お前ら本気でそう言ってんのか？

今はそんな事いつてる場合か？

今がどんな状況かぐらい、見りゃわかんだろ！！」

俺が怒気を込め言つと、男達は息を呑む。

おそらく理解したのだろう。

「分かるんだったら。」

「さっさと手伝えや?」

「……じゃあ、なにをすればいいんだ?」

「そっちにある川の水と俺の鞆の中にある茶葉を使って番茶でも沸かせ。」

「……分かった。」

「分かったなら、さっさと沸かせ。こいつが死んだらどうすんだ!」

「っ!?!ああ!」

すると男達はせっせと動きはじた。

俺はその間にできる事をしておくか。

まず、傷口をつねり血を絞り出す。

そこで茶ができるまで、取り敢えずは水であらうか。

そして鞆から注射器をとりだして、エピネフリン製剤——エピペンを投与する。

前に熱帯地域で活動してた時に用意したのだが、こんな所で役に立つとはな。

よしっ、

これで大夫症状は和らいだはずだ。

あとは傷口を冷やして、番茶で洗って、経過をみればいいだろう。

もし、悪化するようならステロイドを投与する必要があるけど。

「番茶まだかあ〜。」

「今できた所だ!。」

俺が声をかけると、男達は茶を沸かしながら答える。

じゃああとは、寝袋で休ませとくか。

そうして俺は、傷口を番茶で洗って、猫耳を寝かしてやった。

猫耳 side

私が目を覚ますとあたりはもう暗く、夜だった。

私は何やら布団のようなものをかぶっている。

それにここは森の中ではなく、荒野のようだ。

いったいどうなってるのかしら？

確か追っ手に見つかった後、急にえらくなってそれで……

「おっ、目え覚めたか？」

！……！

私が声のした方を見ると、そこには火を起こしてなにやら調理をしている、あの男がいた。

そっだ、倒れてからこの男に治療して貰ったんだ。

「気分はどうだ？」

「右腕はまだ少し痺れて動かしくいけど、それ以外は大丈夫そうね。」

「そっか、ならよかった。」

ほれっ、お粥だ。食べ。」

男は小さな器に入ったお粥を差し出しながら言う。

「……………ありがとう。」

少し熱いが出来立てでおいしい。

「…おいしし」

「どンドン食えよ。」

「こいつは喰わねエと治らないからな。」

言われた通り私が食べるとあいつは満足そうな顔でニッと、笑っていた。

どうしてこいつはここまでしてくれるのかしら？

「ねえ？

あんたが私を治療したの？」

「ん、まあな。」

「なんであんなひどいこと言った私なんかを助けたの？」

「おいおい、人を助けんのになんか特別な理由がいんのか？」

それに、「あれくらい」でヒトを見捨てる程短気じゃ無いからな」

最後の方でこめかみがピクピクしてる所を見ると、どうやら少し気にしてたみたいだ。

良いこと言ってるのに台無しね。

でも、嘘を言ってるようにはみえないし、こいつは今までみてきた男とは違うみたい。

私を治療するときのこいつの目は迷いがなく真っ直ぐできれいだった。

男にはこういう奴もいるのね。

少し見直したわ。

……あくまでも少しだけど。

「まあ、あんたが私を助けたのは事実だし、一応感謝しておくわ。」

「おっ、ならば、一つお願いがあるんだけど。」

「なによ?」

もしかして汚らわしいことを考えてるんじゃないわよね。

「近くの村まで案内してくれないか?」

「えっ?」

私の考えとは裏腹にこいつは簡単なことを言ってきた。

「いや、旅に出たのはいいんだが、道がわからなくて困ってたんだ。」

だから、案内してくれないか。」

道も知らないのに旅に出るんじゃないわよ。

と思ったが言わないでおう。

「あんたってさっきから思ったけどほんと馬鹿ね。

いいわ、それぐらいならやってあげるわ」

ちょっと陳留に着くのが遅れるのは癪だけど。

まあいいわ。

「そうか、助かる。

ありがとうございます。

俺の名前は桐島だ。よろしくな。」

「私の名前は筍？、字は文若よ。

まあ、よろしくしてあげるわ。

感謝しなさいよね。」

彼が出会ったのは後に、王佐の才と称えられた少女。

この出会いは彼等になにをもたらすのだろうか。

そして、彼がこの世界と正史との大きな違いに気付くのはいつなの

だろうか？

「そういえば、私を追ってた賊達はどうしたの？」

「んっ、あいつ等ならちよっと怒鳴って治療を手伝わせた後に、帰したぞ。」

「……………」

## 第五話（後書き）

間違いなどあれば指摘してください。

今後もよろしくお願いします。

## 第六話（前書き）

今回は短めです。

では、よろしくお願いします。

## 第六話

秀哉 side

俺は今、新しくできた旅の連れー！ー！俺？と共に村への道を歩いている。

「へエ、なら俺？はわざわざ曹操に士官する為に袁紹の所を出てきたのか？」

「そうよ。もうあんな馬鹿の下で働くのには嫌気がさしたの。」

こつちの世界で袁紹は馬鹿なのか、

まあ正史でもそんなすごい奴じゃなかったからな。

「でも、それにしてもなんでわざわざ曹操なんだ？」

他にも袁術とか公孫瓚とか有名どころはあるだろ？」

俺はそう思い聞いてみた。

「袁術はあの馬鹿と同族な時点で論外。」

あと公孫瓚は………地味だし忘れてたわ。」

「なかなかひどい言い様だな……。」

そこまで言わせる袁紹ってのがどんなのかみてみたくなるな。」

まあ、こいつなら誰に対しても言いそうだけど。

「あんなの見る価値なんてないわよ。

女であそこまで嫌悪感を覚えたのは初めてよ。

男の次に最低な生き物ね。」

よく次から次へと罵倒がでてくるな。

ん、ちよつとまてよ、

「袁紹が女？」

袁紹って、男じゃねーのか？」

「はあ？なに言ってるのよ。」

袁紹は女に決まってるじゃない。」

「ー？どうなってんだ。」

じゃあもしかして？

「なあ、さっき言ってた曹操も、  
女なのか？」

「当たり前じゃない。

汚らしい男の所に私が士官するわけないでしょ。」

そうですよね〜。

ってことは他の諸侯とかも女よなのか？

ほんとおかしな世界だな。

まあ関係ないけどねエ。

「……あんだ、男よね？」

汚らしいとか言われてなにも思わないの？」

「別にね〜。

人にどう思われようと関係ないしなア。

それともなんだあ。

俺に構ってでも欲しいのか？」

俺はそう言っていじわるそうに笑う。

「なっ、そんなわけないじゃない！

調子に乗るんじゃないわよ！！」

そう言つと筈？はさっさと前を歩いていってしまっ。

わかりやすい反応だな。

「なにしてんのよ。早く行くわよ！」

「はいはい、わかりました。」

そういつて俺たち村を目指していった。

「なあ、まだ村に着かないのか？」

「うるさいわね、もう着くわよ。」

俺が筍？に尋ねると、筍？はめんどくさそうに答えてきた。

案外遠いな。

昨日、一昨日とほとんどやすんでないから、流石に疲れた。

村に着いたらまず、休みてエな。

そんなこと考えてると、少し先から、嗅ぎなれた鉄の匂いが鼻をつ

く。

っ！……！！まさか！

「筈？！」

村があるのはこっちの方向でいいよな。」

「急にどうしたの！？」

ええ、そっちであつてるわ」

っ！やべえな。

「おい、急ぐぞ！」

「だから、なにがあつたていつのよ。」

「村の方向から血の匂いがした。

それもかなりの量だ！」

筈？にそういうと、俺は反応も待たずに走り出した。

後ろで筈？は何か言ってるようだがそれどころじゃない。

段々と血の匂いが濃くなってきた。

すると遠くに村がみえた。

「間に合つてくれよ！」

俺は誰に頼むわけでもなくそう呟いて、走る速さをあげた。

「…………まじかよ。」

俺がついた村は悲惨な状況だった。

周りの家からは火が上がっている。

見渡せば、あちこちにある生きているのかどうかも分からないような人達が見え、聞こえてくるのは彼等の呻き声だけである。

熱風と混ざり、生暖かくなつた死臭が鬱陶しい。

「くそつたれが！」

俺は毒を吐くと現状の確認のために生存者を捜す。

いるかどうか分からないが……

俺が辺りを見渡していると。

「だれなんだ？あんだ。」

と声をかけられた。

そつちをみて見ると、民家の壁にもたれ掛かっている男がいた。

どうやら腕を怪我しているようで、左腕を抑えている。

とは言え、他に比べれば随分とました。

俺はまだ無事そんな人がいた事に安堵しつつ、  
なにがあつたのかを尋ねる。

「賊に…襲われました。」

官軍がきたのですが、来るのが遅かったのと、この村の中で戦った  
のでそれに巻き込まれて……………」。

「そうか、動ける奴は何人居る？」

「もう十人も残っていないと思います。」

いないよりは大丈夫い。

「なら、そいつ等に怪我人をどっか開けた場所に運ぶように言ってくれ。」

「わかりましたけど……あなたは一体何者なんですか？」

「俺かあ？俺はただの通りすがりの医者だ。」

そう言っつて俺はすぐに治療のために動き出した。

筈？side

私は桐島っつて男と一緒に村に向かって歩いてた。

この桐島っつて男は大変不本意だが私の命の恩人でもある。

まあ、かなりの変わり者だけど。

そして、村まであと少しのところまで来た時、

その桐島は急に今までのふざけた顔を、真剣なものに変えた。

そして私に村の方角をたずねると、そちらに走っていった。

どうやら血の匂いがしたらしい。

どうしてそんな事が分かんよ。

試しに私も鼻を動かして、匂いをかいで見る。

……だめだ、分かんないわ。

って、今はそんな場合じゃなかった。

私も早く行かないと。

そんな事を考えたあと、

私も村に向かって走り出した。

ちよつと走ると、村に着いた。

そこで見たのは……悲惨な状況だった。

仕事柄こういったものは何度も見てきたけど、ここまでひどいのは見た事ない。

私は思わず吐き気を感じ、てで口を覆う。

なさけないわ。

こんなんで軍師になんてなれない。

……よしっ。

もう大丈夫ね。

「じゃあ、

まずはあいつを探さない」と。

私は先に行ったあいつを探すためにあたりを見渡す。

すると、少し離れたところにいるのがみえた。

どつやらもつ治療を始めているようだ。

私は状況の確認と指示をもらつたためそちらへと向かった。

「もつと水、持ってこい！！」

もたもたすんなあ。！」

そこで、あいつは周りの数名の男達に怒鳴って指示をしていた。

はいわね。

「ねえ？一体なにがあつたの。」

「どつやら賊と官軍の戦いに巻き込まれたらしい。」

私が尋ねると、怪我を縫い合わせている手を休ませずに答えた。

「なにか私にできることはないの？」

私が言うと、あいつはこちらを少し見てから、十枚程の布を投げつけて、

「その布を使って、怪我したところを圧迫して止血してくれ。」

もし、傷が大きくてしばらく抑えても出血が止まらないようなら、俺を呼べ。

あと、血のついた布は使い回すなよ。

できるか？」

私に指示を出してる間もやっぱりこいつは手を休めず、すごい速さで傷口を糸で縫い合わせている。

「当たり前じゃない！

私をだれだと思ってるの。」

「……そうか、なら頼む。」

…それと言いつつ忘れてたけど、汚れた手で傷口を触るなよ。

敗血症になるからな。

今、きれいな水を持ってこさせてるからそれでこまめに手を洗え。」

「分かったわ。」

かなり、こと細かに指示をしてきたわね。

まあ、人の命がかかっているから当然か。

なら、

「急がなきゃね。」

そういたって今も苦しんでいる怪我人の方へと走っていった。

「ふう、こいつはこれでいいわね。」

五人目になる怪我人を処置し終えた所でそう漏らす。

改めてこの村を見てもほんとひどいわね。

どこを見ても無事と言えるような者はいない。

これじゃあ、あいつもかなり忙しそうね。

そうして私が次の怪我人を診ようとすると、

「だれか！助けてください。」

と、少女の叫び声が聞こえてきた。

私はすぐにそちらを向くと、声のした方に走り出した。

初めてついた村で、惨状に巻き込まれた主人公。

そして、その村で一人の少女と出会う。

その少女が何者で、主人公になにをもたらすか、まだ誰にも分からない……。

## 第六話（後書き）

長くなりそうなので切りました。

明日には次話を投稿したいとおもいます。

第七話（前書き）

うまく纏まらない………

## 第七話

荀？side

私が声のした方へ着くと、そこには一人の少女とその傍で倒れている彼女の母親らしき女性がいた。

「さっき声をあげていたのはあなた？」

声をかけるとその少女は一瞬、驚いたような顔をしてから、

「はい！」

お母さんが大変なんです。

胸と足を切られていて血が止まらなくて………

それにさっきから呼びかけても返事をしないんです。」

と状況を説明した。

みて見るとその子の言う通りその女性は、胸と足を切られていて辺りの土が真っ赤になるほど出血している。

これまで見てきた中で一番ひどいわ。

足の傷の方は私でもどうにかできるかもしれないけど、胸の傷は…

……おそらく無理ね。

あいつを呼ぶしかない、か。

「…どうなんですか?!」

私が考えていると少女が不安そうに聞いてきた。

「私じゃあ、ちょっと無理そうね……」

でも、あっちに白い外套を着た男がいるはずよ。

そいつならなんとかできるかもしれないから私が少し処置するからその間に呼んできてくれる?」

そう言うとき少女は少し明るい顔になって、

「分かりました!

白い外套を着た男の人ですね。

すぐ呼んできます!」

と行って走っていった。

よしっ、

胸の傷はあいつが来てからしか無理だから、その間に足の傷をなんとかしないとね。

私は少女が走っていったのを確認すると、自分にできる治療を始めた。

早く来なさいよ、桐島。

秀哉 side

「この怪我人も治療し終えたから、広場の方へ運んどいてくれ。」

俺は手伝ってくれている比較的は無事だった者達に指示をして、次の怪我人を診る。

彼等が治療の終わった人達を運んでくれるので、誰を治療したか分からないような状況にならないで助かる。

でも、やはり治療できる人間が俺しかいなくて、それに器材が豊富ではないから使い回すために一回一回、熱湯で煮沸消毒しなくてはいけないのにかわりはない。

つまり、どうしても時間がかかってしまうのだ。

処置のスピードはあげているが、それ以外で時間を食ってしまう。

このままじゃマズイな。

そう思いさらに手を速く動かしていると、

「すみません！」

今、よろしいですか？」

見知らぬ少女が尋ねてきた。

「何の用だ？」

見ての通り今、忙しいんだか。」

「ひゃい。」

え〜と、猫の耳をした人か呼んでこいと言われたんですが……………」

俺が少々キツク言ったせいで、

少し怯えて、噛みながら言ってきた。

猫耳？……………ああ、荀？のことが。

あいつが呼ぶってことは、ひどい怪我人がいたってことが。

「名前はなんて言っただ？」

「徐庶といえます。字は元直です。」

どうやらこの少女は徐庶というらしい。

「分かった、すぐに行くから少し待っていてくれ。」

「はっ、はい。分かりました。」

俺は今、治療している怪我人を急いで処置し終えて、道具を消毒する。

「よしっ、いいぞ。」

徐庶、案内してくれ。」

「はい！」

こちらです。」

そして俺は勢い良く走り出した徐庶について行った。

荀?side

少女が去ったあと、私はまず、足の怪我を止血した。

どうやら足の傷はそれほど深くなく、少し押さえると血が止まった。

でも、胸の傷は深く、さつきから押さえつけているが一向に止まらない。

やっぱり私じゃ、無理ね。

あいつはまだこないの!?

先程から少し経つが一向にこないあいつに文句を漏らす。

すると、

「あと少し行ったところですよ!」

と、少し先から先程の少女らしき声が聞こえてきた。

ふう、やっと来たようね。

あいつが来たことで、安堵の息を漏らす。

「徐庶、お前のお母さんはどこにいるんだ?!」

「こっちです。」

お願いします、お母さんを助けてください。」

少女ーーーどうやら徐庶というらしい、が言つとあいつは徐庶のお母さんを診始めた。

「胸の傷が深くてどうしようもできなかつたわ。」

どう？治せる？」

私が尋ねるが、こいつはなににも言わずにただ傷をじっと見つめるだけだ。

「ちょっと、いったいどうなのよ？！」

私は一度無視された怒りもあり、さっきより強く言つと、こいつは黙って立ち上がった、

「……………苟？。」

この女性は後回しにする。

先に他の怪我人を治すぞ。」

と、静かな口調ではっきりと言った。

……………

えっ？！

どういう意味なの？

後回しにするって、どうみてもこの人が一番重傷じゃない。

そう思い辺りを見ると、やはりひどい怪我人は大勢いるがこの人程ひどい人はいない。

どう考えても真っ先に治療すべきでしょ。

「それって、どういづつもり？」

「分からなかったのか？」

後回しにする、まあ率直に言っちゃえば……………見捨てる、ってことだ。」

こいつは苦虫を噛み潰した様な顔をして、少しこちらから視線を外しながら言っ。

「っ!!」

見捨てるってあんた正気なの！

それでも医者なの?!」

私は今もいる、目の前の“医者”にいう。

「あんたがそんな奴だなんて思わなかったわ。

見捨てるなんて最低ね！」

「……………るせえ……………」

「なによ、なんか言いたいことがあるなら言ってみなさいよ!」

「黙れ!……!」

っっ!!

私が罵倒を浴びせていると、さっきまで静かにしていた、こいつが急に叫ぶ様に怒鳴ってきた。

「お前に何が分かるんだ!!」

この人の怪我は、切られたというより剣に刺された傷だ。

傷口は大きくないが、さっき確かめたら空気が漏れるような音がしていた。

おそらく、剣が肺まで到達して肺に穴が空いている!

治すには胸を開胸しないといけないが、そんな機材はここにはない!

それにこれだけの出血だ。

胸を開いても肺の穴を塞ぐまで体力がもたない!

もう………手遅れなんだよ。」

「!!!!でも、だからって見捨てるの?」

少しくらいは何かしてもいいじゃない。」

「じゃあどうする?」

もし、この助かる見込みのない怪我人を治療している間に、他の助

かる怪我人の治療が遅れて死んだら、  
お前は責任が取れるのか?!」

!!.....くっ。

確かにこいつの言ってることは正しいわ。

助かる見込みのない一人を助けるより、助かる十人を救う方が言い  
に決まってる。

だからって見捨てるは.....

でも.....

.....仕方ないのね。

よく見ると、

こいつも手を血が出そうなほどに握って、唇を噛みしめている。

それにさっきの声も最後の方は

泣叫ぶような声だった。

悔しいのはこいつも一緒か.....

私が少し納得すると、

「えっ？

じゃ、じゃあお母さんは……………どうなるんですか？」

先程から黙っていた徐庶が尋ねてきた。

なにがあったのか分からない、といった感じの顔をしている。

…無理もない。

いきなり自分の母親を見捨てるのと言われたのだ、すぐに理解できる訳がない。

「ああ……………そうだ。

徐庶、お前のお母さんは……………もう助からない。」

すると、改めてこいつが絶望の宣告をする。

「えっ、でも……………。」

なんとか、？ なんとか出来ないんですか？」

今にも泣き出しそうな顔で聞いている。

しかし、

「さっきも言ったが、もう治せない。

それに、治療しても体力がもたず死んでしまう。

だから……………無理だ。」

「そんなっ!!」

じゃあお母さんはもう……………」

「……………すまん。」

あいつは申し訳なさそうな顔して、小さな声で言う。

「うっ、うっ、うわぁぁ〜ん」

返ってくるのはさっきと同じことだけだった。

徐庶は大声をあげて泣き出してしまっ。

この姿はしっかりと焼き付けておかないといけないわね。

今、王朝の衰退によって、各地で賊が出てきた。

そのせいで被害を被っているのは、なんの罪もない民達だ。

今もどこかで苦しんでいる民がいるだろう。

こんな世は治さなくちゃいけないわ。

それに……………これ以上、徐庶みたいな思いをする子を出すわけには

いかない。

そのためにも、早く曹操に士官してこの国を変えないといけないわね。

私は今も声をあげて泣き続ける徐庶、を見て決意を新たにしていると、

「荀?。」

ちよつといいか?」

あいつー桐島が声をかけてきた。

「…なによ?」

さっきのこともあり、少々気まずくて刺々しく返事をしてしまう。

向こうも少し気まずそうにしている。

「ああ、徐庶のことなんだが、任せてもいいか?

支えてやって欲しいんだが…。」

って、自分で見捨てるとして心配するなんて人が良いのか、悪いのか分からないわね。

まあ、こいつはそういう奴だったわね……

「分かったわ。」

ならあなたはやるべきことをさっさとやってきなさい。

ポケットと、してんじゃないわよ」

私がそう言つと、予想外だったのか驚いた顔をした。

さっきまであれだけ罵声を浴びせてた私がこんなこと言えば、驚くのも当然ね。

「ああ！」

分かった。なら任したぞ！」

しかし、すぐに元通りに戻ると、

そう言つて桐島は、怪我人の方へ走って行った。

私も休むわけにはいかないわね。

そして、少し落ち着いたらようだがまだしゃくりあげて泣いている徐庶の傍へと向かう。

私になにができるか分からないけど、少しでもこの少女の助けになるために私は動き出す。

この少女一人救えないように国を救うなんてできるわけないわ。

母親は救えなかったけど絶対にこの少女は救ってみせる。

だから桐島、

あんたもしっかりしなさいよ！

陽は既に傾き、暖かい赤色に染まった空に、荀？は呟いた。

## 第七話（後書き）

グダグダになってしまいました。

駄文ですがよろしく願います。

あと、前のいくつかの話を編集しました。

主人公は元ネタとは少し違う性格にしました。

自分の力量不足です。

気にいらない人もいるかもしれませんが、ご容赦下さい。

## 第八話（前書き）

急な展開です。

## 第八話

秀哉 side

俺は今、村から少し離れた静かな荒野にいる。

陽は既に沈み、辺りを照らすのは淡い月の光だけだ。

こんな時でも月はいつものままだな。

荀？に徐庶を任せたと、俺はまだ残っていた怪我人を治療して回った。

全員が全快とはいかないが、治療したものはこれで命の心配はないだろう。

今は動ける村の男達に怪我人の看病を任せている。

だが、今回は全員を助けられたわけでは無く、治療出来ずに亡くなった人もいた。

徐庶のお母さんを含めて、四人か……

くそっ！なんで救えなかったんだ。

自分の無力さが恨めしい。

もっと効率良くやっていたら、見捨てるなんて選択肢を取らなくてよかったかもしれない。

「なあ、俺は正しかったのか？」

空高くに青白くひかる月に向かい問いかけるが、もちろん答えは返ってこない。

ふう、と小さくため息を吐く。

すると、

「こんな所で、何してんのよ？」

後ろから声をかけられた。

見てみれば、そこにはもう見なれた猫耳フードの少女が立っていた。

「荀？か……」

よくここが分かったな。」

「村の人に聞いたのよ。」

それより何をしてたの？」

「ちょっと、月でもみようかな、って思ったんだよ。」

「ふーん、そう。」

「?? ? ……きれいな月ね。」

「ああ。」

そう言った所で会話が途切れ、この辺り一帯が静寂に包まれる。

大きな建物が何もない荒野はよけいに広く感じ、遮るもののない空に月は余計に映える。

ああそういえば、徐庶は大丈夫だったのか？

荀？が見てくれてたと思うが……

聞いて見るか、

「なあ、徐庶のことなんだが、

大丈夫だったか？」

「ええ、大丈夫よ。」

今はだいぶ落ち着いたようで、寝てると思っわ。」

「そっか……………」

よかった。」

「あのあとすぐはまだ混乱してたみたいけど、

落ち着いたあとは、あんたが治療しなかったことも理解したわ。

「……だから、正しかったのか？、なんて言ってんじゃないわよ。」

あの子は分かってくれたのか。

強い子だな。

てかつ、聞いてたのかよ。

ちょっと恥ずかしいじゃねえか。

まあでも、ほんとはよかった。

苟？がそう言ったことで、幾分か気持ちが軽くなる。

氣い遣わせちまったな。

どう考えても立場が逆だろ。

「はあ。」

こんな子供にまで慰められるなんて情けない。」

俺もまだまだだな、と小さく呟く。

でも、荀？のいう通りだな。

俺のやるべきことは、悩むことじゃねえ。

それにぐちぐち悩んでも仕方ない。

俺はそう思い、それを気づかせてくれた荀？に礼を言おうと荀？を見る。

見てみると、荀？は下を向いてなにやら小さく呟いているようだ。

「ん？どうしたんだ、荀？？」

「だれが……………ですって……………」

なにか言ってるがよく聞こえない。

気分でも悪いのか？

不思議に思い、もう一度尋ねると、

「だ、か、ら、誰が、子供ですって…！」

うおっ！

急に荀？が怒鳴ったことに驚き、俺は少し怯んでしまう。

でもね、

「子供じゃないってことは、いくつなんだ？」

「もうとっくに成人してるわよ!!」

苟？はまだ怒ったように怒鳴る。

そうかあ、成人してるのか……

んっ、成人？！

いや、どう見てもまだ発育し切ってないだろ……とくに胸とか。」

「っ!!」。

へえ、あなたは人をそういう目で見てるのね。」

心の中で言っただつもりがどうやら声に出してしまったようだ。

苟？は自分の胸元を隠すようにしながら、こちらを軽蔑するような視線を向けてくる。

「いや、別にそういうわけじゃない。

ただ、客観的に事実から判断しただけだぞ。」

まあ、観察は医者の基本だしな。

「っっっ、っるさいわね!!」

別にあたしが小さいからって、あなたの人生になにか関係あるの？」

「いや、全くないが。」

それに、小さいのが悪いわけじゃないぞ。

寧ろ、機能性だけを考えれば小さい方が優れていると思う。」

あっちの世界にいた時、同僚に巨乳の知り合いがいたが、衛生環境がよくなかったせいもあって、汗疹に悩んでいた。

まあ、それ以上に得することも多かったみたいだが。

「！！へえ〜。」

あなた、男の割になかなか分かってるじゃない。

そうよ、胸なんて邪魔なだけなのよ。」

苟？は胸を張って誇らしそうに言う。

まあ、何事も考え様だからな。

本人がそう思うならそれでいいだろう。

「そうかい、そうかい。」

まあ、かんばね。」

俺が投げやり気味にそう言うと、苟？は気にいらぬ、といった様

子になる。

「むう、あんた絶対馬鹿にしてるでしょ。

……まあいいわ。

それよりもあんたは明日からどうするつもり？

私は明日にも陳留に向けて出立するけど………」

と、荀？は聞いてきた。

そうか、じゃあ

「ここでお別れだな。

俺はもう少しここに滞在して怪我人達の世話をするつもりだ。」

「まあ、あんたならそうするわよね。

私は曹操の下でこの国を変えーーーいや、救ってみせるわ。

だから、あんたも精々頑張りなさい。」

急に堂々と宣言してきた。

目に不安の色はなく、まっすぐと先を見据えている。

国を救う、か。

よくもまあ、そんな大層なことを堂々と云うとは………  
すごいな、荀？は。

俺に政治のことは分からん。

だから荀？みたいに国なんて救えない。

だから俺は今、目の前の苦しむ人に手を差し伸べる。

荀？は国を救い、俺は患者を救う。

救うものは違えど、最終的に救いたいものは一緒か。

荀？の決意を聞いた俺はそう考える。

「おう！

俺が大手を振って治療をできるような世の中にしてれよ。」

「ふん、

もうあんたなんて必要ないくらい平和な国にしてやるわよ。」

相変わらず、厳しいな。

でも、そうだったら、俺は廃業かあ。それもちよつと困るな。

そんな時は、なにしようかな？

苟？に言われたことで俺は真剣にそんなことを考えてしまっ。

「また、何かやらしいことでも考えてんじゃ無いわよね？」

ふう、私は明日に向けてもう休ませてもらうわ。

あっ、

あと、すっごく癪なんだけど

私の真名、あんたに授けるわ。

私の真名は桂花よ。

ありがたくおもいなさいよ。」

偉そつに言ってきた。

ん？

いま、真名って言ったがなんのことだ。

「なあ、真名っていったいなんのことだ？」

「あんた真名がなにかしらないの！？」

はあ、真名ってのはその人の真の名で、親しい者にしか許さない名前よ。

許可なく真名を呼べば切り捨てられても文句言えないほど、神聖なものなのよ。」

へえ、そんなんがあるんだ。

それより、切り捨てるのかなかなか物騒だな。

うっかり呼ばないように気をつけないと。

「でも、そんな大事なもん俺に許して良いのか？」

「一応命の恩人だし、あんたは、まあ他の男よりはましみたいだからいいわ。」

それに私がいいって言うてるんだから、ありがたく受け取りなさい。

「

さいですか。

じゃあ、ありがたく受け取けとつときますかね。

それにしても、昔の中国に真名なんてあったか？

やっぱり、この世界は少しおかしいな。

「なら、俺のことも秀哉って呼んでくれ。

親しいやつはだいたいそう呼んでくる。

それに、俺だけ貰うのも不公平だしな。」

俺はそう思い、自分の名前を教える。

多分、俺の場合は「秀哉」が真名つてのに当たるだろう。

たしか、苗字は言ったが名前までは教えてなかったはずだ。

「分かったわ。」

秀哉ね、一応受け取ってあげるわ。」

苟？――桂花は、一瞬驚いた顔したがすぐにいつもの様子に戻り、言ってくる。

「じゃあ、私はもう行くわ。」

秀哉、あんたも早く休みなさいよ。」

そして、俺が返事をする、桂花は村の方へと歩いていった。

俺は静かな荒野に一人残され、頭上の月をみる。

心なしか、先程より強く光ってるように感じる。

そして、そして軽く微笑み、

「俺もやってやるうじゃねえか。」

こんな時代なんかに負けてたまるかよ。」

と、静かにそれでいて力強く言い放った。

月はさらに光を強め、辺りを照らしていた。

~~~~~

「ふあ~~~~あつ。」

俺は大きなあくびとともに、目を覚ます。

あれっ？

ここ何処だ？

俺が辺りを見渡すと、どうやらここは村の民家の中のようなのだ。

そこで俺は今、布団で寝ている。

でも、なんでこんなところにいるんだ？

たしか昨日は、

荀？と話していて、それでその後……………

だめだ思い出せない。

別れた所まではおぼえてるんだけどなあ。

俺が考えていると、

「あつ、起きましたか！」

何処かで聞いたことのあるような声が聞こえてきた。

見てみるとそこには、茶色い短髪の少女————徐庶がいた。

「……………」

……………なんで、いるんだ？」

俺は恐る恐る聞いてみる。

「そんなの、ここが私の家だからに決まってるじゃないですか。」

徐庶はさも、当然のように言ってくる。

ますます意味が分からんぞ。

荒野にいた俺がいきなり徐庶の家にいるなんて、ありえないだろ。

「じゃあ、なんで俺がここで寝てるんだ？」

「えっと、

昨晚、先生の帰りが遅くて、

村の人が心配して探しに行ったら、村の外れで寝ていたそうです。

それで、そのままにするのもいけないので私の家に運んでもらいました。」

あ~~~~。

村に帰るまですら体力がもたなかったのか。

……………まあ、二日間徹夜してあんなだけ動けば仕方ないか。

「そうか、　？　？悪いな。」

「いえ、先生にはこの村の人を何人も助けて頂きましたから、これくらい当然ですよ。」

徐庶はもう一度、当然のごとく言う。

強いな、　？

自分の母を治療してくれなかった俺にそんなことが言えるなんて。

「お母さんのことは……………もう大丈夫なのか？」

やはり気になってしまっているので、聞いてみる。

「はい……………」

あの時は取り乱してしまいましたが、
冷静になって考えれば先生の判断は正しかったと思います。

あの状態ではお母さんは助から無いつて、私も薄々は分かっています
したし……………」

先程よりも少し暗くなった様子で徐庶は言う。

「！そう、か……………」

俺はかけるべき言葉が見つからずそんなことしか言えない。

聞くべきじゃなかったか。

「それに……………」

「それに？」

俺が軽く後悔していると徐庶は思い出すような顔をして、言う。

「私が泣いていても、なにも変わらない。

お母さんもそれを望んでるわけが無い。

って桂花さんにも言われましたし。」

徐庶は少し苦笑いを浮かべる。

「あいつ、そんなこと言ったのか？」

俺はそれを言ったという、あの猫耳の毒舌少女、桂花の顔を思い出す。

……………うん、

あいつなら言いそうだ。

でも、今回はそれに助けられたな。

まあ、あいつなりの優しさだろう。

それに、いつの間に真名を教えるほど仲良くなってんだ？

「だから、私、

泣いてるだけじゃなくて、いまも苦しんでるたくさんの人を救いたい！、と思ったんです。」

堂々と言う。

桂花にしても、徐庶にしても、この世界の人達はほんとすごいな。

俺も負けてられねえな。

「なら、そんな気持ちを忘れずに頑張れよ。」

「え？」

なに他人事みたいに言ってるんですか、私はたくさんの人を救う「医者」になりたいんですよ、だから、私を弟子にしてください!」

徐庶は頭を下げて言うてくる。

ちよつとまてよ、

弟子になる?

なんで、そうなるんだ?

俺は突然の申し入れに頭がついていかない。

「駄目、ですか?」

俺がなにも言わなかったからか、徐庶は不安そうに聞いてくる。

「なあ、本気なのか?」

苦しいものを何度も見るぞ、……お前のお母さんみたいな人もな。

それでも、医者になりたいか?」

「はい、勿論覚悟の上です。

だから、お願いします!」

徐庶ははっきりと返してくる。

その目に迷いは無い。

「はあ、分かった。

たいしたことは教えられないかもしれんが、それでもいいなら、いいぞ。」

「！！ありがとうございます！」

私の名前は徐庶、字は元直、真名は雫 しずく と言います。

これから頑張りますので、よろしくお願いします、師匠！」

「ああ。

俺の名前は桐島 ？秀哉だ。

秀哉ってのが真名にあたると思うから、それで呼んでくれ。

だから、師匠ってのはやめてくれないか？」

師匠なんて呼ばれたことが無いから違和感があっただけかたない。

「いえ、私にとって師匠は師匠ですから、そこは譲れません。」

と、徐庶————雫はきっぱりと言っ。

はあ、よく分からんが仕方ないか。

俺は何度目になるか分からないため息を吐く。

「じゃあ、好きに呼んでくれ。」

「分かりました！師匠。」

俺が許可を出すと雲は元気良く返事をする。

さて、これからこの時代にはない医術をこの時代の人に教えることになるが良いのだろうか？

下手したら歴史を大きく変えてしまつかもしれない。

それは許されるのか？……………

なんて、思ったがそんなんやっぱどうでもいいな。

俺がここにいてだけで歴史を狂わしてるんだしな。

俺の仕事は人を救う、
それだけだ。

俺は新たにできた弟子、徐庶元直をみて、決意を固めた。

「よしっ、じゃあ零。

荷物をまとめて、さっそく怪我人を診に行くぞ！」

「??？」

師匠。今日は村の人がみてくれましたし、日も暮れているので、明日にしませんか？」

そうか、日が暮れてしまったのなら仕方ないな。

この時代にはまともな明かりなんてない。

だから日が暮れると、手元が見えなくなってしまっ。

術後診断は明日にするか。

そのために今日は早く寝て……………？

まあよ、さっきまで寝てたよな俺？

ってことは……………

「……………あれ!？」

俺ってどれくらい寝てたんだ?
だ？」

「えっと、だいたい一日くらい寝てたと思います。」

！！まじかよ。

そんなに疲れてたのかよ、俺。

おそらく、環境が変化したせいもあるのだろう。

自分の予想以上に疲労が溜まっていたようだ。

「でも、俺が治療した連中は大丈夫だったか？」

こんな衛生状態だ、手術熱の可能性も充分あると思うのだが。

俺が尋ねると、

「はい、みなさん今の所は、順調に回復してます。

あと、今日の朝に起こそうとしたのですが桂花さんが、寝かせてあげなさい、って言ったので起こしませんでした。

いけませんでしたか？」

ああーまた気遣わせちゃったのか。

しかし、こんだけぐっすり寝たのはいつ以来だろう。

感謝しないとな。

「いや、全然かまわんぞ。

ところで、

桂花は何処にいるんだ？

礼を言いたいんだけど。」

俺がそう言ったことで、雫は安堵した表情になる。

そして、申し訳なさそうな顔で、

「桂花さんなら、もう陳留に向かって出立してしまいました。

もう少しくらいゆっくりして欲しかったのですが。

」

と言った。

だろうな。

たしか昨日そう言ってたしな。

見送りぐらいはしたかったが、過ぎたことは仕方ない。

また、いつかあった時に言えばいいか。

「じゃあ、もう少し休ませてもらうな。

朝になったら起こしてくれるか？」

「分かりました！」

では、お休みなさい。」

そう言っつて霏は、去って行く。

さて、昨日の治療で鞆の中にあつた、縫合用のナイロン糸と、ガーゼはほとんど使い切つてしまつた。

かなりあつたんだけどな。

そして、これからは俺の記憶が正しければ乱世となる。

このままじゃ道具が全くなりねえ。

代替になるものを探さないといけないな。

俺はこれからのことを考えながら、ゆっくりと眠つていった。

第八話（後書き）

これから主人公がいろいろ考えて機材を代替しながら治療していきます。

これからもよろしくお願いします。

第九話（前書き）

話が進まない……………

とにかく、よろしくお願いします。

第九話

秀哉 s i d e

俺は今、村の中を歩いている。

顔をあげると東から登ってきた朝日が痛い。

昨日、あのまま眠った俺は寝過ぎたせいもあり、雫に起こされる前に目が覚めてしまった。

雫はまだ寝てたようでもないので、村の人に聞いてこの井戸まで来たわけだ。

井戸に着くともう既に数人の村人がいた。

彼等は俺に気づくと口々にお礼を言ってくる。

別にたいしたことはしてないのにな。

そんなことを思いつつ俺は軽く返事をして、辺りを見渡す。

まだ、家などには昨日の傷跡が生々しく残っているが、朝早くにもかかわらず何人かの村人が忙しそうに動いている。

その顔に絶望の色はなく、活気に満ちている。

……平和だな。

俺はそんな光景に安堵して少し微笑む。

「村の復興にはどれくらいかかりそうだ？」

俺は近くにいる村人に尋ねてみる。

「えっと、

家屋のほうは修理するのにまだ少しかかると思いますが、

何分死者が少なかったので、長くはかからないと思います。」

「そうか、ならよかった」

村人は笑顔でいうのをみてそう思う。

どうやら俺のしたことは無駄じゃなかったみたいだな……

俺は少し心が晴れた気がした。

その後、しばらく村の人達と、世間話をしていると、

「あつ、いたいた。」

「おい、師匠くっくっ！」

遠くに、手を振りながらこちらに走ってくる少女が見えた。

村の人達は雫が俺のことを師匠と、呼んだことに少し驚いていたが、すぐに納得したような顔をする。

「はあはあ。」

ここにいたんですか。

起きたらいないから、探しましたよ、師匠。」

朝から走ったせいか、息を切らして膝に手をつきながら、雫は言うてきた。

「ああ、わりいな。」

ちよつと、早く目が覚めちまったからさ。」

「行くなら、一声かけていってくださいよ。」

少し息も整った様子で、そう言うてくる。

そんなことで起こすのも悪いだろ。

と思ったが、言つとややこしくなりそうなのでやめておこう。

そんなことを考えてる間に寧は、周りの村人達に気づいたようで、挨拶をしに行ってしまったようだ。

少し聞き耳を立てると、

村人に俺の弟子になったことを聞かれ、恥ずかしそうになにか言ってるのが聞こえる。

おっ、今度は村人に軽くからかわれたようで、顔を赤くして反論しただした。

……………ふう。

まだ、お母さんのことを引きずってるかと思つたが、あの様子なら大丈夫だな。

俺は未だに笑つてる村人の中で諦めたように溜息を吐く寧を見て、そう思う。

「あつ、そうだった。

師匠、朝御飯ができたんで来ました。

……あれ？聞いてますか？」

「ん?!」

わりいわりい。

分かった、すぐに行くな。」

いけねえ、ちよっとポットしてたみたいだ。

いつの間にか近くに来た雫に声かけられて、俺はハツとする。

「はい、じゃあ先に行って準備しておくので、来てくださいね。」

そう言うと、雫はもと来た方向へ走っていく。

よしっ、俺も行きますか。

そうして俺は、朝日を浴びて輝いて見える雫の背中の方へと歩きだした。

~~~~~

「ふう。これだけか。」

俺は床に並んだ機材を見て呟く。

雫と一緒に朝御飯を食べた後、俺は今ある機材の確認をしている。

今残ってるのは、

縫合用の針が数本、

持針器、せっ子、ピンセットが大小一つずつ。

あと、止血用鉗子とメスとクレーパ。

それと別に、注射器五本、縫合用ナイロン糸がせいぜい数人分と、滅菌手袋が三枚ある。

エピペンとか医薬品も少しあるが、ないものと考えた方がいいだろ

う。

……少ないな。

せめて局所麻酔薬でもあるといいのだが無い物ねだりか。

まあ、仕方ない。

無い物はある物で補わないといけない。

まず、確保しないとイケないのは消耗品なのが、

とりあえずガーゼは滅菌した布で代用できる。

消毒液は酒を蒸留すれば代わりになるだろう。

あとは縫合糸なんだが、この時代で使えそうな糸と言えば……

……

?? ? ? 絹糸か。

ナイロンに比べれば少々使いにくいだが、充分使える。

その後漢末期にはかなり質のいい絹糸が作れて、ヨーロッパの方へ輸出してたはずだ。

シルクロードがあつたくらいだしな。

でも、問題は値段、かあ。

さつき朝御飯の時に、粟に聞いてみたが、やはり絹糸は高価らしく、街までいかないとなかなか買えないらしい。

俺がこの世界のお金を持っているわけがないし、粟も……………

そんなに持っているようには見えない。

やっぱ、先立つものは金っていうことか。

どうしたもんかねえ……………

……………うん、考えても仕方ない。

とりあえず道具のことは街に行つてそれから考えよう。

案外、どうにかなるかもしれない。

だからとりあえずは、

「粟！？」

これから往診に行くから支度しろ！」

「はいっ、分かりました！」

？できることをしないと。

俺が呼ぶと台所の方で、片付けをしていた雫が、いい返事を返す。

往診って言うても、容態の確認が主な内容になる。

やはり旅立つにしても、自分の患者には責任を持たないといけないだろう。

でも、よほど目を離せないような患者がいらないなら、明日にでも出發したいと思う。

いまでも、多くの人が戦で傷ついている。

ならば、ここでのんびりしてる時間はない。

一人でも多く救うって誓ったしな。

「師匠！

準備ができました。」

俺が今後の予定を考えていると、雫は準備万端といった様子で話しかけてきた。

「よしっ、じゃあ行くか。」

「はい！」

どうやら雫は初の診療ということまで、やる気満々みたいだ。

元氣よく返事をしてくる。

いいことだな。

そして、俺たちは往診のために家をでた。

雲side

私は今、師匠と一緒に村の人達の家に行診に来ています。

弟子になってから初の仕事だから頑張らないと！

と、私はやる気満々だったのですが、

どうやら今回は往診といっても、患者さんに話を聞いて容態を確認するのが主な内容のようです。

だから、これといった治療はしていません。

少し残念です。

今、師匠は足首を捻挫した方の包帯を巻き直しています。

「粟、一人でもできるようにしっかり見とけよ。」

「えっ、はい。」

不意に師匠は目線は向けずに言ってきました。

私は別に包帯ぐらいは一人でも巻けるのだけど、と思いましたが、言われた通りに見てみます。

……えっ？

なんですかこの巻き方？

師匠は足首に包帯を巻いていますが、なにやら布を交差させたりしながら巻いています。

こんな巻き方、見たことありません。

どうやら少ない布でも、しっかり固定する巻き方らしいです。

包帯の巻き方ひとつで、こんなに違うんだ。

今回の往診で私の学ぶことはいっぱいありそうです。

そう思い、私はより真剣な目を師匠に向けました。

その後、しばらく村の人達の家をまわって治療をしていたのですが、もう陽が暮れてきて、私と師匠は今、帰路についていることです。

「ふう。」

私は前を歩く師匠の背中を見て溜息をはく。

あの後師匠からは、脈の取り方をはじめ、  
静脈注射のうち方、  
気道確保の方法、

それと治療する時の注意として、清潔を保つことを教えてもらいました。

どれもこれもいままで聞いたことがないことばかり。

水鏡先生のところで、いろいろ学んだつもりだったんですが、  
こつも知らないことばかりだと自信なくしてしまいます。

「はあ。」

私はもう一度大きく溜息をはく。

「どうしたんだ？」

さつきから、溜息なんかはいてさ。」

どうやら聞かえてしまったらしく、師匠はこちらを軽く振り返りながら聞いてきた。

「いえ、これまでそれなりにいろんな事を学んできたつもりだったんですけど、」

今日、師匠にいろいろ教えてもらって知らない事ばかりで……

ちょっと自信がなくなっちゃいました。」

「はっ！」

そんな事で悩んでんのか？」

私は真剣に落ち込んでいるのに師匠は軽く笑い飛ばしてきます。

「むうう、そんな事って言わないでくださいよ。」

私にとっては重大な事なんですから。」

「わりいわりい。」

でも、そんなんで落ち込んでちゃこれから先、やってけないぞ。」

師匠はまだ笑いながら言ってきた。

「確かにそうなんですけど……」

でも、病気は目に見えない細菌などによって感染する。って師匠は言っていましたよね、

でも、どこでそんな知識を得たのですか？

そんな事が書いてある書物なんて、見たことはありません。」

私は聞いてみました。

たしかに、師匠が教えてくれたことは、すごく分かりやすかったのだけど、いままでそんなことは聞いたことがない。

でも師匠の治療を見る限りでは、嘘とは思えません。

師匠の治療はそれらの知識に裏付けされているようにしか見えなかった。

なら、いったい師匠はどこでそんな知識を得たのだろうか？

「あ〜と、まああれだ。」

天の知識ってやつだ。」

師匠は困ったような顔で言ってきます。

天の知識？どういう意味だろう？

！！あつ、もしかして、

「じゃあ師匠は「天の御遣い」なんですか？」

「天の御遣い??」

なんじゃそりゃ？」

「知らないんですか？」

乱世に平和をもたらすっていう管絡の予言ですよ。」

「ん？」

よく分かんが俺はそんなたいした者じゃないと思うぞ。」

師匠はよくわからないといった感じで、否定する。

確かに師匠は白い服を着ているが特に光ってるわけじゃない、

それにたしか天の御遣いは、陳留の曹操って人が拾ったって聞きました。

てことは、

「やっぱり違うんですか。」

私は少しがっかりしながら言う。

「まあ、その天の御遣いってのはよく分からんが、

さっきのことは気にしなくていいぞ。

これからちよつとづつ学んでればいい。

一度に全部知るなんて、たとえ諸葛亮孔明でも無理だろうしな。」

師匠は笑いながら言うてくるけど、あね？

「師匠は朱里ちゃんのこと知ってるんですか？」

どうして師匠の口から同門の生徒だった朱里ちゃんの名前がでてくるのだろう？

そんなに有名だったかな。

私は師匠に聞いてみた。

「!!!え？

それって、真名だよな………」

もしかして、知り合いなのか？」

「はい、朱里ちゃんとは同じ塾で学んでいましたから。」

そう言っただけはあの、いつもはわわと言っただけの友達を思い出す。

元気にしてるかなあ？

「ん、ちょっとまてよ。」

雫の名前って、徐庶元直であってるよな。」

師匠はなぜか恐る恐る聞いてきました。

あれ、言っただけじゃなかったっけ？

「合ってますけど、急にどうしたんですか？」

師匠は呆然と立ち尽くしている。

本当にどうしたんだろう？

「師匠？大丈夫ですか？」

「え？あつああ、大丈夫だぞ。」

師匠はなにやらあきらかに動揺した様子で言ってきました。

そして、

「じゃあ、雫は徐庶元直で諸葛亮とは友達なんだよな？」

わざわざ確認してきました。

「はい、そうですけど……………」

私が言うと同時に師匠は頭を抱えてなにかを呟きました。

まだ、一昨日の疲れが残っているのかな、

こういう時はそつとしいたほうがいいよね。

多分、少ししたらもとに戻れると思うし。

うん、そうしよう。

私はに頭を抱えている師匠を見てそう思いました。

師匠の言った通り、私はまだまだこれからのだから、少しづつでいいからしっかり学んでいかないといけないな。

悩む暇があつたら、その分学ばないと。

それに、私にはこんなにいい師匠がいるんだ頑張ればきっと大丈夫だよな。

私はそう決意して、そのたよれる師匠をみると、

まだ頭を抱えて、何か言っていました。

……大丈夫だよね？

その頃秀哉は、

「まてまて、諸葛亮の友達で徐庶元直っていったら魏の軍師じゃねえーか。

なんでそんな人が俺の弟子になってんだ。

それにいま思えば、苟？だって、魏の軍師だろ。

俺、めっちゃ知り合いだよ！！

こんな簡単に会えるものなのか？

……………すごいことなんじゃね？」

今ごろ気付いたのだった。

## 第九話（後書き）

指摘などあればどんどんお願いします。

## 第十話（前書き）

遅くなりました。

少し短めですがよろしくお願いします。

## 第十話

秀哉 side

「よしっ、旅に出るぞ！」

朝御飯を食べ終わった俺は突然に言った。

雫は理解が及ばなかったのか、少しポカんとした表情だ。

「え？急にどうしたのですか。」

雫は片付けのために台所へ向かう足を止めて、聞いてくる。

「どういう意味って、そのまんまの意味しかないだろ。」

全く、そんなことも分からんのか？

徐庶元直の名が廃るぞ。

まあ、それは置いて、

今日で俺がこの村に来てから、だいたい一週間が経つ。

この一週間、治療した患者の診療をしてきたが全員、峠を越したよ  
うだ。

後は村の人達に任せても問題はないだろう。

だから、俺がここに残る必要はもうない。

それに、ちょっとしたでも医療道具を揃えるために街に行きたいと思っ

このまま道具がなかったら救える命も救えないしな。

「というわけで、今日の昼頃には出発するから準備しといてな。」

「……………はあ、分かりました。」

では、準備しておくんで、出発する時に呼んでください。」

雫は諦めたような目で言ってくる。

なんでそんな目してくるんだよ？

まあ、たしかに急だけどさ、

戦場医なんてみんなそんなもんだぞ。

俺はそう思ったのだが、

ともかく俺も準備しないとイケないので先に部屋へと戻っていった。

~~~~~

「ギョ」。

まだ着かないのか？」

俺はだるそうに聞く。

今日の昼前には村を出て、ずっと歩き続けたのにまだ、なんにも見えてこない。

もう、陽は西に沈みはじめてる。

「なあ、いつぐらいには着くんだ？」

俺はもう一度聞く。

昼飯も食ってないから、腹も減ってきた。

「もう少し待ってくださいよ。」

たぶん、今日中には着きますから。」

「今日中につて、まだなにも見えてこないんだが。」

と言って、額に手を当てて遠くを見してみる。

が、やはりなにも見えない。

「あと、七里くらいですからもう少ししたら見えてきますよ。」

雫は言ってくる。

七里？

たしか中国の一里は五百メートルくらいだから、あと……三キロと
少しくらいか。

たしかに、それくらいなら今日中につけるだろう。

でもなんで雫はそんなことが分かるんだ？

少なくとも俺にはさっぱり分からんぞ。

「なあ、雫。」

どうしてそんなくわしく分かるんだ？」

この時代まともな地図なんて簡単には手に入らないだろう。

村にあった地図を見たが、かなり大雑把なことしか書いてなかった。

「えっと、水鏡先生の所で学んでいる時に一度正確な地図を見るこ
とができたんで、

それです。」

ああ、なるほど……………

って！おい、

「じゃあ、一回見ただけで全部覚えたのか?!」

「細かくではないですが、大体は覚えましたよ。」

それがどうかしたんですか？」

おいおい、一回見ただけで全部覚えるなんてどんだけ記憶力良いんだよ。

まあ、流石は徐庶元直！
つてことか。

それにしてもこんな良い人材を弟子なんかにしてていいんかな？

徐庶元直って知った時は結構慌てたが、

「本人がいつて言ってるし、まあいいか。」と思いつてそれ以来気にしなかった。

でも、こんなすごいとはなあ。

割りと本気で考えてしまう。

「師匠！。

早く行きますよ。」

少し前のほうから、雫の音が聞こえてきた。

今更言っても仕方ないな。

手を振って俺を呼ぶ雫を見てそう思つと、俺は小走りですちらに向かった。

みなさんおはようございます。

レポーターの桐島です。

いま私は街の宿屋に来ています。

………「冗談はこれくらいにして、

昨日、街まで着いた俺たちはもう夜だったこともあり特になにもせずに宿へ泊まることになった。

その時の宿の手配などは勿論、雫にすべて一任した。

イイ弟子持てて俺は幸せだよ

………生活力ないな、俺。

まあここまではよかったのだが、泊まるうとした宿に空き部屋が一つしかなかったのには困った。

流石に恋人でもない男女が同じ部屋で寝るのはまずいだろ。

いくら俺にそんな気が無いと言ってもなあ……。

そう思い、俺は外で寝るわ、と言ったのだが、

雫が、師匠を外で寝かせるなんて出来ません！それなら自分が外で寝ます。と言ってきた。

いやいや、それこそもつと悪いだろ。

年頃の女の子が街中で寝るとか危なすぎる。

そして、そんなかんざ言い合って他のだが最後は同じ部屋で寝ることになった。

同じ部屋と言っても、俺は椅子で寝て、雫がベッドで寝るようにした。

雫は、自分が椅子で寝る。と言っていたが紳士としてそこまでさせるわけにはいかないので、半ば無理矢理に寝かせた。

で、お互いそのまま寝ていまに至る。

雫はまだベッドで寝てる。

昨日はあれだけ歩いたから疲れたのだろう。

そう思い俺は荷物の整理でもしながら雫が起きるのを待つことにした。

「ふえ？」

なんで師匠がここにいるんですか？」

しばらくすると、ベッドのほうから声が聞こえてきた。

まだ寝ぼけているのか眠そうな目を擦っている。

「ああ、そういえば昨日師匠と一緒に街にきてそれで……………」

ああしまった!！」

雫はどつやら思い出したようつで、唐突に大声を上げた。

朝から他の客に迷惑じゃ無いだろうか？

慌てている雫を前に、俺はそんなことを心配する。

「すみません、師匠！」

寝過ぎしちゃいました。」

雫は慌てながら頭を下げてる。

「おいおい、大袈裟だな。」

まだ陽が登ってからそんなに経ってないし、俺が早かったただけだから気にすんな。」

「えっ、でも師匠よりも遅く起きる弟子って……………」

雫はなにやらぼそぼそと言っている。

「はあ、いちいちそんなこと気にしてんな。」

そんなんじゃない気がもたねえぞ。」

「でも……………」

俺がそう言っても雫はまだ気にしているようだ。

はあ、仕方無い、

「分かった、じゃあ今日俺は街を回るからその案内をしてくれ。」

確かここに来たことあるんだろ？

それでちゃらってことでどうだ。」

「！！分りました。

その仕事、しっかり果たして見せます。」

雫はパア〜と晴れたような顔になり、気合の入った声で言う。

そこまで気合入れなくてもいいが……

まあ、いいか。

別に悪いことじゃ無いしな。

「よしっ、ならさっさと朝御飯でも食べに行くか。」

俺はそう言って、部屋を出ようとする。

後ろでは、はい、と大きな声が聞こえてくる。

さっきから思うが、他の客に迷惑じゃ無いだろうか？

少し心配になりながら俺は朝御飯を食べにいった。

「はあ~~~~~」。

俺は料理屋の席に座って大きな溜息を吐く。

なぜこんなことになったかと言つと、

朝御飯を食つた俺たちは、まず街を回り目当てである絹糸を探した。

雫の案内もあり意外にもすんなりと見つけることが出来た。

まあ、見つけたのだが……………

なんであんなに高えんだよ!!

確か高価とは聞いていたが、あそこまでとは思わなかった。

あんな値段じゃ、少し買っただけで村の人からお礼として貰ったお金がすっからかんになってしまう。

あれじゃあ、庶民の手にはいかないだろう。

そして、俺は失意のまま街道をあるいていと雲が、

「師匠」。

そんな落ち込まないで下さいよ。

絹はまだあまり数が無いから高くなってしまっんです。

都に行けばもう少し安いかもしれないけど、

こんな田舎街じゃ仕方無いですよ。

そんなことよりも、もう昼頃ですし元気出すためにもなにか食べませんか？」

どうやらいろいろあったせいで既に昼頃のようだ。

確かに腹も減ったしそうするか、

と思い俺たちは近くの料理屋に入ってしまった。

そして今に至る。

「まあ、元気だして下さい。
落ち込んで何にも変わりませんよ。

それよりもほら、師匠もなんか頼んで下さい。」
雫はメニューにをこちらに渡しながら言ってくる。

いくらそう言っても、道具集めが初めからこつも失敗すると流石に
つらいぞ。

あーあ、これからどうしよう？

やっぱり、金がないとどうにもできない、
だからまずは金を稼がないといけないか……………

そんな事を考えさせられた。

でも、今はとりあえず雫の言う通りだな。

「じゃあ、俺はラーメンと麻婆豆腐で。」
と渡されたメニューも見ずに言う。

「じゃあ、麻婆豆腐二つとラーメン一つお願いします。」

雫は俺が言ったのを聞くと、店員に注文をした。

店員が去って行くのをみて俺はふう、と一息ついて前にある湯飲みのお茶を飲む。

烏龍茶か、なかなかうまいな。

.....

.....

「ちよつとまてえい！ー！！」

あまりに普通すぎて逆に落ち着いちゃまったじゃねえか。

俺はメニューも見ずに適当にラーメンと麻婆豆腐って頼んだんだけど、あるの？

麻婆豆腐はまだ分かるがこの時代にラーメンなんてないだろ。

店員もすぐくふつうに対応してたが.....。

おかしいぞ。

もしや、ラーメンという名のへんてこな民族料理みたいなのが出てくるのかもしれない。

きつとそうだ。

これは覚悟しておかないといけないな。

俺はそんな感じによく分からない覚悟を固めるのだった。

前では雫が、

いきなりどうしたんだこの人は？

みたいな目でこちらを見てくるが気にしない。

俺は闘志を燃やしながらラーメンを見つめる、どうやら見た目は普通のラーメンのようだ。

だが、まだ安心はできない今までとてもおいしそうなた見た目をしながら、味は……………な現地の料理も数多く見てきた。

これもどうせその類だろう。

しかし、頼んだ物を残すわけにもいかない。

俺は決死の覚悟でラーメンと箸をのばして、食べた。

端からみたら変人だろうな俺。

味は普通のラーメンのようだ。
うん、美味い。

だが、見た目が普通で味は美味しくても安心は……………できる？
味が美味いってことは、

「普通のラーメン？」

もう一口食べてみるが、やっぱり普通に美味しい。

……………なんてこった。

こんなところで、こんな物が食えるなんて。

俺はつつこむことも忘れてがむしゃらにラーメンを食べる。

端からみたらやっぱり変態だろうな。

でも、そんなことはどうでもいい！

今はただこのラーメンが食べればいいのだ。

「やっぱりここの麻婆豆腐は美味しいですね。

師匠のラーメンはどうですか？

って、ええ？！

なんで泣いてるんですか！？」

雫は驚いて言うてくる。

仕方無いだろ、向こうの世界にいた時はアフリカにいたからこんなまともな中華料理なんて食べれなかったんだ。

ここ二三年の主食は、キャッサバ芋をすりつぶした物によく分からない葉っぱをすりつぶしてかけた物だった。

食べるというよりも、流し込む感じだったな。

たまに村の市場で肉なども売ってたが、冷蔵庫なんてなくてほとんど腐ってた。

賞味期限偽装なんてかわいいもんだぞ、腐った物を平気で売ってるのだからな。

とにかく、こんな美味い中華なんていつ振りになるかわからん、

だから感動するに決まってるだろ！

「ぐすっ、

だって、こんな、美味い、料理なんて、久しぶり、だからさ、仕方無いだろ。」

俺は涙ぐみながら言う。

雫は一瞬哀れむような目をしたが、すぐに慈愛を持った目で見てきた。

いつもなら、

そんな目でみるな！

と言いたいが、今はそんなことよりも食うことが先決だ。

俺はものすごい勢いで食い続けた。

多分、俺は今幸せの絶頂にいるのだろう。

この幸せがずっと続けばいいと思う。

しかし、やはりそうは問屋が卸さない。
その幸せは長くはつづかなかつた。

「こんな物、食ってられるかぁー!!」

不意に聞こえた罵声により俺の幸せは奪われることになる。

第十話（後書き）

変なところで切れますが容赦下さい。

一昔前の話ですが、国境なき医師団で派遣された人が苦しんだ物の一つに食事があるそうです。

特に衛生状態が悪いところでは毎日のように下痢になったそうです。

第十一話（前書き）

纏まらずにだらだらと長くなってしまった……

よろしくお願いします

第十一話

秀哉 side

「おい！この店はこんなもん客にだしてんのか！」

「そつだ！こんなん食べねえぞ」

店内に怒号が響く。

床には見るも無惨になった料理が転がってる。

どうやら男の二人組が料理にケチをつけているらしい。

やっぱりいつの時代にもああいった輩はいるんだな。

こんな美味いのに勿体無い。

床に落ちている料理を見て思う。

でも俺には関係ないなと我関せず、ラーメンをすする。

うん、美味い。

「ちょっと師匠？」

あれって大丈夫なんですかね？」

雫は少しおどおどしながら、聞いてくる。

「ん？」

大丈夫、大丈夫。

ああいう馬鹿はほっときゃいいんだよ。」

「でも、ひどいじゃないですか？」

「こういった場合は部外者が関わってくると余計ややこしくなるものだ。」

俺は軽く手を振りながら言う。

確かに見ている気持ちいいもんじゃないが、巻き込まれちゃかなわんからな。

「そういうものですか……」

雫はまだ納得のいかない表情だったが、

俺がそういうもんだ、と諭すと、

はい、と小さく呟き麻婆豆腐を食べ始めた。

「おいおい、ねえちゃん。

こんなもん客に出しといて謝罪の一つもないのかよ。」

「じっ、じめんなさい!」

こんなことをしてるうちに、あちらはさらに悪い状況になっているようだ。

なぜか、店員の女の子が謝らされている。

意味が分からんが、
なんで店員が謝らないといけないかの過程が気になるな。

とはいえ、流石にあれは言いすぎじゃないかな？

そろそろ誰か止めた方がいいんじゃない。

俺は全く他人事の様にして、ラーメンを食べる。

実際、他人事だし、俺が出てっても返り討ちにあっただけだろう。

「ふむ、その御仁方、もうそこら辺でよろしいのではないか？」

ふと声が聞こえた。

そちらを見ると白い服を着て、なにやらメンマが大量に乗ったご飯をたべている女性がいた。

どうやら彼女が言ったみたいだな。

いろいろとつっこみ所満載なのだが、それよりもおれが気になったのはその女性が着ている服だ。

あれは！！

「…ナース服？」

まさかこんな所で俺の「彼女に着て欲しい服」第一位にランクインのナース服に出会えるとは。

ちなみに、同率一位で軍服がランクインしている。

やはり、女性は派手な露出よりもスレンダーさが重要だと思う。

いや、まあ別に露出した服が嫌いなのわけではないが、

やっぱり、ナース服や軍服を着て、ピシッとした雰囲気的女性が一番だな……………

って、そんな事はどうでもいい。

……いや、どうでもよくはないか。

まあ、とりあえず今は置いといて、

男たちは腰をおられたのに怒ったのか、怒りの矛先をその女性に向ける。

「ああ？おい、ねえちゃん

なんだ？俺たちに喧嘩を売るってか？」

いつの時代のヤンキーだよ！

と言いたくなるほど分かりやすい文句を二人組の一人が言う。

「別に喧嘩を売っているわけではない。

ただ、お主達の様な輩がいると、美味しい飯も不味くなるから言っただけだ。」

女性は男たちに視線もくれずに淡々と言う。

あれだけ迫られてもまったく動じないとは……………

なかなかの実力者なのだろう。

かっこいいねえ。

しかし、男たちもそんな態度をされて黙っているわけもなく、

「てめえ、澄ました顔してんじゃねえぞ!！」

と女性に殴りかかるうとする。

「あ!！」

前に座る雫が小さく漏らした。

そして次の瞬間、

ガシャンとなにかが割れる様な音が店内に響く。

どうやら先程、男が放った拳は女性にかわされたようだ。

そして、拳をかわされた男はバランスを崩し、女性の机に体ごと突っ込んだようだ。

……だっせ。

だが、男が机に突っ込んだせいで、机の上にあったメンマ丼？は床へと落ちてしまった。

さっきの音はこの音か。

見れば床には先程の料理と同じ様に無惨な姿になったメンマ丼が落ちていた。

「くそっ！」

もう許さねえぞ！」

倒れていた男は立ち上がった様で、えらくご立腹のようだ。

完全に自業自得なのに、よくも見事に人のせいに行けるな。

さて、それ向けられた本人はどんな様子かな？

と思って先程の女性に目をやると、

そこには鬼がいた。

うおっ！！

女性から出るなにか凄まじいオーラに俺は一瞬たじろぐ。

雫も小さくだが

「ヒッ！」

と悲鳴をあげている。

やべえな、俺も少しびびっちゃった。

女性はどす黒いオーラをまといながら、軽く肩を震わせている。

でも、なんであんなに怒ってたんだ？

俺は原因を探ってみるが、

ん、分らん。

「貴様ら一体何をしたのかわかっているのか？」

俺が考えていると、女性が低くドスの聞いた声で言う。

男たちはなにがなんだか分からない様子だ。

「今、床に落ちているメンマは、私が食べてきたものの中でも一、二を争うほどのものだった。」

それを貴様らはこんな姿にしたのだぞ。

メンマに謝れ！！」

……………え？

怒った理由はメンマなの？

それだけでここまで怒るか、普通？

男達も理解出来ていないようだ。

今ならこいつらの気持ちが分かるような気がする。

「はっ？」

何言ってるんだ、てめえ。

意味わかんねえぞ。」

一足早く現実に戻ってきた男が言う。

「だから、このメンマに謝れと言っているのだ！」

女性は床のメンマを指差して怒鳴る。

「だから、意味わかんねえって言ってるんだろ！！」

男は痺れを切らしたのか再び殴りかかった。

「ふん、メンマを理解できないとは、なんと愚かな賊だ。」

と言いつつ、女性は拳を軽くかわし、男の腹に蹴りをくわえる。

「がはっ！」

男は嗚咽を漏らして、壁の方へと吹き飛ぶ。

おお！

なかなか吹っ飛ぶな。

予想どおりの実力だな。

俺はそんな感じに、ぼおーっと成り行きをみる。

「くそつたれ!!」

もう許さねえ、ブチ殺してやる!」

吹き飛んだ男は腰にある剣を抜きながらいう。

もう一人の男もそれに合わせるように剣を抜く。

ちよつと、危なくねえか?

「ふつ、いいだろう。」

貴様らのメンマを理解せぬその腐った性根、この趙子龍が叩き直してやる!」

女性も赤い槍を持ってそう言う。

あれ?

その理屈でいくと俺の性根も腐ってるぞ。

……甚だ疑問だがまあいいや。

前では雫があわあわとしている。

場違いだが、なんか和むな。

俺は周りが騒がしい中、なぜか慌てる雫を見て和んでいた。

「はあ、はあ」

「くそつたれ……」

「どうした、威勢が良いのは口だけだったのか？」

おっと、

俺が雫を見て、和んでるうちにいろいろと進んでたようだ。

見れば、二人の男は肩で息をして、一方で女性は余裕の表情で軽口をたたく。

素人から見ても実力の差は歴然だ。

少し心配したがこれならこのまま女性が軽くないなして終わるだろう。

まあ、俺は傍観するのでしょうか。

「うるせえ！」

片方の男はもう一度斬りかかるが、女性は槍をうまく使い受け流す。

そして同時にすぐ槍を切り替えし、柄の方で男のみぞうちを強打する。

「ぐええ！」

男はにぶい声を出して、倒れる。

ありゃあ、当分立ち上がれないな。

俺は蹲ってうめいている男を見て思う。

ってことは、あと一人だな。

そして、もう一人を見るとこちらも辛そうにしている。

こりゃあ、もう終わりそうだな、

でもなにか嫌な予感がする。

「さて、あとはお主一人だがまだやるのか？

今すぐに、己の非を認めて去るなら見逃してもいいのだが。」

女性は静かに言う。

確かにどう見ても男に勝ち目はなさそうだし、それが賢明な判断だろう。

だが、ここで潔く引くようならこんな騒ぎ起こらないわけで、

「くそが！

いい気になってんじゃねえぞ！」

予想どおりの反応で男は剣を構える。

「ならば、手加減はしないぞ」

と言い女性も槍を構える。

男はかろうじて剣を構えているが、よく見れば足は少し震え、息はさらに荒くなっている。

次の一撃で終わりか……

俺はそう思っていたのだが、

その予想は悪い方に裏切られることになる。

対峙した二人のうち先に動いたのは男だった。

しかし、その向きは向かいにいる女性の方ではない。

「ひぁ？」

男は最初に謝らせていた店員の女の子を羽交い締めにして、自らの剣を突きつけた。

193

！？まずい。

「へっ！」

これならどうだ、ねえちゃん。

おい、武器を置け！

じゃねえとこいつがどうなっても知らねえぞ。」

「ひっ!？」

男はいやらしい笑顔を浮かべて言う。

くそっ!

さっきの予感はこれだったのか。

「くっ、

貴様、それでも武人か?!」

「はっ、勝負なんてどんな手使つてでも勝てばいいんだよ。」

女性は歯ぎしりをして、さらに怒りをあらわにした。

勝つためになんでもしていいわけがない。

手段を選ばないせいで、被害を一番に被るのは民衆だ。

胸糞わりい。

しかし、人質を取られている以上下手な動きはできず、女性は構えを解く。

どうするべきだ?

流石に傍観のつもりだったが、こんな状況になってはそもそも言っ

られないな。

幸いなことに男の視界に入らない位置に俺は座っている。

そこで俺は静かに男の背後へ移動する。

男は女性と話していてこちらにはまったく気付いていない。

チャンスだ。

人質がいるから一発で確実に決めないといけない。

なら、攻撃する場所は一つ！

そして俺は、静かに大きく足を振り上げ、

男の背後から、股間を思いつ切り蹴り上げた。

「……………」

男は声にならない悲鳴をあげる。

クリーンヒットのようだ。

勿論、男がそんなことをしているうちに人質になっていた少女は逃げたした。

ふう、これでよし。

俺は少女が逃げたのを見て安堵する。

「てめえ！」

よくもやってくれたな。」

倒れた男は少し涙目になりながらゆっくりとだが立ち上がってきた。

あれを受けて立ちあがれるとは……

浅かったかな？

「どなたか知りませぬが。

助太刀感謝します。

貴様、人質などという卑怯な真似をして、覚悟は出来ているんだろ
うな。」

女性は俺に軽く御礼を言ったあと、男に対して怒りを潰したような
声で言う。

なんかさっきよりも怒ってないか？

……………まさか?!

「うるせえー!!」

俺がそう思うと同時に、

男は剣を振りかぶり女性へ斬りかかる。

っ！まずい。

今の女性の雰囲気は人質を取る前とは明らかにちがう。

おそらくもう本当に手加減もせずに本気でいくだろう。

今いけば男は多分、

殺される。

傍観してる場合じゃねえ、

止めねえと。

俺は止めようとするがもうすでに遅く、

斬りかかった男の剣は防がれ、

そしてがら空きになった男の腹を女性の槍が、切り裂いた。

男の腹からは鮮血が舞う。

男は、ぐっ、とかるく漏らしたあと腹を抑えながら前のめりに倒れる。

そして男が倒れると同時に周りからは歓声があがる。

っっ！！！！

やばいぞ、あのままじゃ男は死んでしまう。

くそっ、なんで人質を取った時にこうなることがわかんなかったんだ。

でも、今更いっても仕方ねえ。

そんなんよりも今はこいつを救わないといけない。

俺はすぐに鞆をあさり手術道具を出す。

「鞆！

今すぐ厨房にいったって煮沸した水と塩をもらってきてくれ！

あと、この道具を消毒……………

蒸籠で蒸してきてくれ。

大至急頼む！！」

俺は道具を渡しながら鞆に指示をする。

「?!、分かりました！

大至急やってきます！」

雫は一瞬驚いたようだがすぐに俺の意図を理解してくれたようで厨房の方へ走っていった。

よしっ、その間できることをしておくか。

俺は鞆から出した手袋をつけて男へと近づぐ。

さて、

とりあえずは意識レベルを確認するか。

「おい、大丈夫か？」

俺は地面に横たわる男に軽く呼びかける。

しかし、男からの返事はない。

「おい！大丈夫か？」

今度は先程より大きな声で肩を叩きながら呼びかける。

「ぐっ、な……んだ？」

すると男は弱々しくだが目を開けて返事を返してきた。

自発的開眼に自発呼吸は出来ているようだ。

「おい、ここが何処か分かるか？」

「さっき……から、何を……聞いてんだ？」

「そんなのはどうでもいい！

ここが何処か分かるか？」

「くっ、料理屋……だろ。」

男は顔をしかめながら途切れ途切れに言う。

よっ、

見た感じ見当識もはっきりしている。

意識レベルは大丈夫そうだ。

だが、さっきから右手の爪の根元を強く抑えているがそれに対する
反応が鈍い。

出血が多いせいで痛覚が少し麻痺しているのか。

「今からお前の治療をするが、多少痛いと思う。

我慢してくれ。」

「俺……は、たすかる……のか？」

「ああ、大丈夫だ。
簡単には死なせねえぞ。」

俺がそう言つと、安心したのか軽く笑つと気を失つた。

俺の目の前じゃ死なせねえ。

例えそれが誰だとうともな。

「師匠！」

言われたもの、持ってきました！」

そんな間に雫が戻ってきた。

両手に色々と抱えているのが見える。

「よしっ、じゃあまず塩と水をくれ。

それと………ほら。」

俺は雫に予備の手袋を渡す。

急の出来事に雫は少し戸惑っている。

「なにボケつとしてんだ！」

すぐにそれをつけて静脈注射の準備をろ。

それが終わったら、出血の状態を知らせてくれ！

できるよな？」

俺は口の端をあげてニヤツと笑いながら言う。

「はい！

分かりました。」

俺が言ったのを聞くと、雫は驚いたあとに、嬉しそうに返事をした。

そういえば、手術の手伝いをさせるのは初めてだな。

ってことは、雫のデビュー戦か。

なら、いつちよ完封勝利と行きますかね。

俺はいそいそと準備する雫を見てそう思う。

しかし、

その思いは後ろで突きつけられた赤い槍によって水を差された。

「なんのつもりだ？」

俺は手を動かしたまま目も向けずに後ろの槍を構えた女性――
――趙子龍に言う。

「なんのつもりか？ですか？」

それはこちらの台詞ではありませんか？

……お主はいつたいなにをしているのだ？」

「見りゃあ分かんたろ、怪我の治療だよ。」

俺はやはり目も向けず答える。

「くっ！」

なぜそのような者を治療するのだ？

そいつは斬られても当然のことした。

自業自得ではないか？！」

趙雲は声を荒げて言う。

気迫が首に当てられた槍を通じて伝わってくる。

正直怖いがここで引く訳にはいかない。

「ああ、確かにこいつは斬られても“当然”の人間だ。斬られたのも自業自得だ。」

「ならば、なぜ?!」

「でもなあ、人間である以上治療されて“当然”。

違うか?」

「むっ!!」

俺が言ったことに対して言い返せず趙雲は黙ってしまふ。

「別にあんたが悪いっていう訳じゃないし、それを責めるつもりはない。」

ただこいつには人である以上治される権利があるし、俺には治す権利がある。

だから……

治療の邪魔はするな。」

俺は小さくだが、ドスのきいた声で言い放つ。

趙雲は納得したのかそれ以上は言ってこなくなった。

「ほらっ、分かったなら治療の邪魔だから退いてくれ。」

俺がそう言つと、趙雲は小さく頷いて槍をひいて去っていった。

「雲！」

注射の準備は出来たか？！

「はい！出来ました。」

あと、傷口ですが幅はだいたい八寸位です。

それとどうやら中の血管が切れていてそこからの出血が激しいです。

「

俺が聞くと、雲はすぐに返す。

しっかり俺の言ったことは出来てるみたいだ。

初めてだから、緊張してないか心配だったが杞憂だったな。

「分かった！」

じゃあ俺は処置の準備をするから、これを静脈に注射してくれ。」

そう言つて俺は先程、趙雲と話している間に作った、即席の生理的食塩水を渡す。

水に0.9%の食塩を混ぜることで作れるこの生理的食塩水に出血による血漿の不足を補うために注射する。

本当ならリンゲル液の方が浸透が早いのだが、今ある材料では作れないから仕方ない。

雫にそれを注射するように頼む。

雫は受け取るとすぐに動いてくれた。

その間に俺は道具の確認と怪我の観察を行う。

さて、怪我の概要はだいたい雫からきいた通り。

切られたのは右腹、深いが肺や肝臓までは届いていない。

また内部で三箇所、血管が切れている。

まずはこれを塞がないとな。

「雫、注射が終わったらこっちにきて俺が今からすることをしっかり見ておいてくれ。」

経験に勝る学習はない。

特にまだ、駆け出しの雫にとっては今回は貴重な経験になるだろう。

「はい、分かりました。」

どつやらもう終えたらしく、雫はこちらに寄ってきた。

俺はそれを確認すると、治療を始める。

まずは血管を鉗子ではさみ止血をする。

そして一本づつ丁寧に結紮していく。

血管を直接縛るなんて発想は、まだこの時代には馴染みがなくて雫は興味津津といった様子だ。

無理もないな、パレが血管結紮止血法を一般化したのは千年以上後のことだ。

地方ではそれよりも前からやっていたところもあるそうだが、

流石にこの時代ではそれもないだろう。

そんなことを考えながら、俺は次々血管を結紮していった。

パチンツ。

ふう、俺は全ての処置を終えて傷口を縫合も終えた。

患者の意識はまだないが、脈もはっきりと打っているし、呼吸も落ち着いてきた。

おそらくじきに目を覚ますだろう。

「そいつは……助かったんですか？」

途中で目をさました、最初にのされた男が聞いてくる。

「ああ、もう大丈夫だ。」

でも、当分の間は激しい動きはさせないようにつけてくれ。

傷口が開くかもしれないからな。」

「っ!!!」

こんな俺たちのためにありがとうございます。」

男は少し涙ぐみながら言う。

おいおい、大の大人が泣いてんじゃねえよ。

その後、術後の生活についていくつか注意しておいた。

そんなことをしているうちに、患者の方も目が覚めたみたいだ。

そして勿論店の客には二人して謝らせた。

あの店員には特にな。

それでもって最後に俺と雫に感謝の気持ちを述べた。

そして、二人は自分達の宿へ帰っていった。

俺と雫でそれを見送った。

さて、その雫はっと、

「雫、初めての手術はどうだった？」

「えっ、はい。」

えっと、初めてっていつても私はほとんど何もしてませんし、それでもすごく疲れちゃって改めて自分の力不足を思い知らされましたよ。」

雫は静かに自嘲するような笑みを浮かべる。

「なあに、お前はまだまだこれからだろ。」

少しづつ学んでけ。」

そう言っつて、俺は雫の頭をワシヤワシヤと撫でる。

「ひゃ！」

もう、やめてくださいよ。」

雫は少し乱れた髪を手で直しながら言っつ。

「でも、今回の手術で一つ分かったことがあります。」

急に胸を張っつて言い出した。

「なんだ？」

「やっぱり、死んでいい人間なんていないんだと思っつたんです。

どんな悪人でも死んだら全てすむわけじゃない、
それどこか死ねば被害者の心に禍根を残す。

だから、私、これからもどんな人でも救っつて行きたいなと思っつます。

「

男たちが去っつていっつた方を見つめながら雫は力強く言っつ。

本当に似てゐるなあいつに。

西に沈み始めた夕陽は眩しくて俺は目を細める。

弟子の成長が頭に浮かび少し顔がにやける。

「師匠……こわいです。」

急ににやけてどうしたんですか？」

「いや、綺麗な夕陽だと思ってな……………」。

あんたもそう思うだろ？

なあ、趙子龍？」

「いつから気づいてたのですか？」

後ろから趙雲の声が聞こえる。

うしろかよ！

てつきりあそこの物陰にいたと思ったのだけど。

俺は予想が外れたことと、検討違いの方向に声をかけてたことに内心焦るが、

ばれていないようなので、まあいいとしよう。

「いや？何となくそんな気がしてな。」

それで、声をかけたただけだ。」

何とかごまかしておく。

勘違いなんて知られたら恥ずかしい。

「まあ、いいでしょう。」

趙雲も、これ以上は詮索しないようで助かった。

「それよりも、家の弟子はそんなことを思ったようだが、あんたはあいつらを見てどう思った？」

俺は気になったので聞いてみる。

あと、趙雲の服だがよくみるとナース服とは少し違うようだ。

……どうでもいいけど、念のために言っておく。

「いえ、それでも私は賊を助けようなどとは思えません。

ただ、だからと言ってその考えを否定は出来ません。」

「ああ、こう言うもんには答えはない。

だからそれでいいと俺も思う。

ただ、俺たち医者は目の前で助けを求めるやつがいたら、そいつが

どんなやつでも手を差し伸べちまう生き物だ。

それを知つといてくれ。」

そつだ、俺たち医者には常に一人でも多くの命を救つために、最善の手を探してるんだ。

今までも、そしてこれからもな。

患者が何者かなんて関係ない。

理解されなくてもいい、それでも俺はそうあり続けると誓つたんだ。

「ふつ、あなたは本当におもしろい御仁だ。

私の名は趙雲、字は子龍。

あなた方の名前もお聞きできるだろうか？」

趙雲は笑みを浮かべいつてくる。

「ああ、俺は桐島秀哉だ。

それと、」

「その弟子の徐庶、字は元直です。」

と自己紹介する。

やっぱり、趙雲みたいだな。

こんなところでまた有名人に会うとは、運がいいのか。

それにしても、武将達はみんな美女、美少女なのか？

苟？にしても徐庶にしてもそうだし。

「ふむ、桐島殿に徐庶殿か。」

うむ、あなた方に会えて良かった。

また、何処かであったらともに酒でも飲みましょう。」

「はいっ。」

では、趙雲さんお元気で。」

「元気でな。」

「ええ、では！」

そう言って趙雲は去っていった。

それにしても今日は疲れたな。

それに腹も減ったし何か食べるか……………

そういえば俺、昼飯はどうしたっけ？

確かラーメンは食べ切ったんだが……………

ああ！

「置きっぱなしだ……………」

なんてこつたままだほとんど食ってないんだぞ、麻婆豆腐。

俺は惚けている雫を置いて走り出した。

まだ食えるかな？

本格的に動き出した物語。

徐庶も決意を新たにし二人はさらに乱世を進んで行く。

冷めた麻婆豆腐はそれはそれで美味かったのは別の話である。

第十一話（後書き）

星の話し方ってこれでいいんでしょうか？

不安です。

第十二話（前書き）

遅くなりました!!

駄文ですが、どうぞ。

第十二話

秀哉 side

唐突だが、「ことわざ」というものは人間の本質を端的で的確に表すものが多い。

例えば、かの有名なアメリカのジョン・スミス氏は、

「働かざるもの食うべからず」

という言葉で人間の義務を簡単に表現した。

そして、それらのことわざはいつの時代であろうと変わることはない。

つまり、なにが言いたいかと言つと………

今、俺が皿洗いをしているのも仕方ないことなのだと思う。

どうしてこうなったのだろうか？

俺は皿を洗う手を休めずに、少し前の事を思い出す。

.....

.....

.....

趙雲と別れてからだいたい一週間が経った。

そして今はいつも通り、宿屋で朝食を食べているのだが……

「??？」

今のってどづいの意味だ？」

俺は雲に聞く。

「だから、このままだと後数日で一文無しになってしまうんです。」

今度は雲ははっきりと言う。

まじかよ……

確かにここ一週間はいろいろと買う物があって、金の消費が激しかった。

いろいろと買い物をしたからな。

その一つに絹糸がある。

最初に高すぎて諦めた絹糸だったのだが、

諦めきれずあの後、何度か俺は少しでも安く売ってもらおうと交渉をした。

値切りは消費者の特権だと思う。

しかし俺の努力にも関わらず、あの店の親父はなかなかの頑固で全然値切ってくれなかった。

こちらの足元を見るような値段で平気で売ってくる。

このままじゃ、いつまでも買えなかったのだが、

三日前に粟が、

「私が値切ってみてもいいですか？」

と言った事で状況は一変した。

どうせ無理だろうと、

俺は半ばやけくそで任してみたのに、あれほどすごいとは………

雫が店主と話し始めると、みるみるうちに店主の顔が青ざめていった。

そして何度も安くなった値段を提示してくる。

おい!?

俺の時は全然安くしてくれなかったのに!

急に安くなったことに俺は驚く。

しかし、それでも雫はただひたすらにも言わずに首をふっている。

何度も言っても首を振るだけの雫の態度に痺れがきたのか、店主はやけくそになり、

「なら、これでどうだ!」

と、最初の半額以下の値段をだす。

その瞬間、今まで黙っていた雫の目が光るのを俺は見逃さなかった。

雫はそれを聞くとすかさず、

「本当ですね?」

と確認をとる。

とても素晴らしいとしか言い用がないほどの笑顔だ。

そこで店主は冷静になったのか、しまったという感じの顔になるが、一度言ってしまったことをなしにするわけにはいかず、なにも言えず黙っている。

「わかりました、じゃあその値段でお願いします。」

笑顔で雫は言い放った。

店主はあわあわと口を動かすことしかできない。

「師匠！」

この値段なら変えますよ」

雫は少し離れて見てた俺を手を振って呼ぶ。

店主は泣きそうにこちらを睨んで、

「あんたの差し金か！」
と目で訴えてくる。

その横では雫が満足そうにニコニコと笑っている。

すごい構図だな。

まあ、気にしても仕方ないので、俺たちはありがたくその値段で買

わせて頂いた。

帰り際に後ろで店主が、

「もってけ、泥棒ー!!」

と言っていたが、

別にこちらは悪くないだろう

.....多分。

雫に、

「何を言ったんだ？」

と聞くと、

「え？ちよつと“お話”してきただけですよ。

物分かりのいい店主で良かったです。」

とこれまた素晴らしい笑顔で返してくれた。

俺は今後この笑顔を忘れることはできないだろう。

いろんな意味で.....。

まあ、そんなことがあつて絹糸が買ったんだが、安くなったとはい
え少ない手持ちには痛い出費だった。

だから、金欠になるのは納得できる。

そしてあれこれ考えるうちに、

「働くしかない。」という一つの真理に俺たちは辿り着き、この間いざこざがあった料理屋で働かしてくれることになった。

この間の一件で向こうはこちらのことを知っており、
「困っているなら……」と雇ってくれた。

本当にいい人だな。

俺はこの店の店主を思い出しながら思う。

そしていざ働くことになったのだが、
俺に料理などできるわけもなく、厨房に入ることはできない。

ならば！とホールの方に入ったのだが、注文を聞いただけで小さな少女に泣かれてしまった。

曰く、

「顔が怖い。」
とのことだ。

……………泣いてもいいよな。

俺は涙ぐんで雫に慰められながら、俺を指差してそう言った少女の顔が頭に浮かび泣きそうになる。

強面なのはわかっているが、まさか泣かれるなんて。

俺としては最高の営業スマイルだったのに……………。

何がいけなかったんだ？

まあ、そんなこんなで厨房もだめ、ホールもだめ、な俺にできることと言ったら、

皿洗い、掃除しかなく冒頭に至るわけだ。

なんか自分で言っていて悲しくなってきた。

ちなみに雫は、料理も出来て、ホールも十分にこなせるので、厨房とホールを行き来している。

別に羨ましくなんかないぞ！

ただ、人には向き不向きがあるだけだ！

とはいえ、俺にもちゃんと役立てることがあるわけだ。

例えば、

「おい！桐島！」

客が喉に食いもんをつまらしちまったみたいだ。

来てくれ！」

「ああ、わかった！」

すぐに行く。少し待ってくれ。」

俺は洗いかけの皿を片付けると白衣を羽織り呼ばれた方へ歩きだす。

これで何度目だ？

俺がここで働き始めてからこういった事が何度もあった。

そのたびに医療知識を持つ俺が呼ばれるわけだ。

これがなかったら皿洗いと掃除しかできない俺がここで働けていないと思う。

無理を言っただ働いているのだし、その分は返さないといけないな。

俺は歩きながら考えているうちに、前に雫が男の子の背中を叩いているのが見えてきた。

「雫、状況を説明してくれ。」

「はい、男の子が喉に食べ物詰まらせてしまって、今は呼吸も止まっています。」

さつき、気道確保をして見ましたが回復しませんでした。」

俺はそれを聞くとすぐに、

男の子のお腹に手を回して、握り拳をつくり、みぞうちあたりから上方へと突き上げる――腹部突き上げ法を行う。

しかし、なかなか吐き出す気配がない。

くそ！だめか。

なら、

「気道切開をやる！」

雫は宿へ戻って俺の鞆をもってきてくれ。

それとこのあんた！

厨房に行って熱湯をもってきてくれ。」

俺は腹部突き上げ法を繰り返しながら言う。

雫達は指示通りすぐに動き出してくれた。

窒息した場合三分以内に呼吸を回復させなければ脳に酸素がいかず助かったとしても、重い障害を残すかもしれない。

こんな小さな子にそれは酷すぎる。

早くしてくれ、

俺は今ここにいない雫に祈る。

「師匠！持ってきました。」

雫が息を切らしながら鞆を持ってくる。

だいたい窒息から二分くらいか。

急がねえと！

「すぐに中から、メスと透明な管を出してくれ！

わかるよな。」

「はい！

これですね。」

雫は鞆を漁りすぐに中から、メスとゴム管を渡してくれた。

どうやら教えたことはちゃんと覚えているみたいだ。

俺はそれらをすぐに熱湯で消毒して、気道切開に入る。

周りでは俺がいきなり男の子の喉に刃物を入れたのに驚いたのか、小さく悲鳴が聞こえる。

まあ、そんなの気にする暇はないけどな。

俺は気にせずに治療を続ける。

よしっ、気管に達したな。

俺は刃先に抵抗がなくなるのを感じると、すぐにゴム管を挿入してカニューレとして使う。

そしてゴム管を通じて息を吹き込む、

すると、スウー スウーと小さいが確かに呼吸音が聞こえてきた。

気道確保完了！

あとは、気道異物を吐き出させるだけだ。

俺は手でゴム管を抑えながら、もう一度、腹部突き上げ法と背部叩き法を試す。

頼むから吐き出してくれよ。

俺は男の子にそう言いながら、それらを繰り返す。

しばらくすると、

ケホッ、という声とともに男の子の口から詰まっていた異物が吐き出された。

それと同時に男の子は自身の口で呼吸を始めた。

「ふう、これでよしと。」

俺がそこまで言うと、周りからはワァと声上がる。

その中から一人の女性が出てきて頭を、これでもか！ってくらいに下げて御礼を言ってくる。

おそらくこの子の母親だろう。

別に今回はそんなたいしたことしてないのだけだな。

ここまで感謝されると少し困る。

まあ、悪い気分ではないが。

俺は軽く返事を返しておいて、男の子の喉に開けた穴を縫合に入
た。

何げに待ちで買った絹糸の使用の第一号だが、大丈夫だよな。

多分、ちゃんと滅菌はしたし、抜糸も気をつければそんな大変なこ
とにはならないだろう。

俺は未だにスヤスヤと寝息をたてて眠る男の子を見て思う。

その後、男の子は店の方で少し寝かせておいて、目を覚ましたとこ
ろで母親と一緒に帰っていった。

最後に気道切開の後なのであまり大きな声で話せないが、眩しいく
らいの笑顔で、

「ありがとう」

と言ってくれた。

やっぱ、これも最高の報酬だよな。

これからもああいった笑顔を少しでも多く助けられたらいいと思う。

俺にどれだけ救えるのかはわからないが……………

と、まあこんな感じで俺の料理屋での一日は終わっていく。

大変だが何とかやっていけるだろう。

そしてこれからくるであろう乱世に向けて金をためておかないといけないな。

それに雫にもまだまだ教えることは山程ある。

とりあえず、今を頑張っていくか。

俺は洗いかけになっていた皿を洗いながら考える。

そして、

「今日は疲れたし、早めに寝ようかな？」
と呟く。

「桐島！」

なんか客がみんな、料理を食べた途端に腹が痛くなったらしい。

すぐ来てくれ！！」

焦ったような男が飛び込んでくる。

……………頑張ろう。

桐島の苦勞は多いようだった。

第十二話（後書き）

間違いがあれば指摘お願いします。

第十三話（前書き）

遅くなりすみません。

言い訳はあとがきで………

第十三話

秀哉 side

俺は、目の前にある巨大としか言いようが無いほど大きな門を見上げる。

そう、ご察しの通り俺たちは今、この時代の都――洛陽に來ている。

ここまで來るのに、本当にいろいろあつたな。

一ヶ月程前、街の料理屋でバイトをしていた俺達だったが、ある日こんな噂を聞いた。

「華佗と言う、凄腕の医者が都にいる」

というものだ。

普段ならそんな噂なんて気にしないのだが、

今回は出てきた名前が凄すぎる。

華佗といえば、後漢時代の名医だ。

そして、人類初の全身麻酔手術を行った人物でもある。

つまり、医者として一度はあってみたい人物なのだ。

もしよければ、その麻酔薬――麻沸散だったか？をわけてもらいたい。

どんな成分かは全く分からないが、手術が成功したことから使えるものなのだろう。

今は圧倒的に薬品が足りない。

少しでも使えるものが欲しいと思う。

あと、雫曰く、もっと大きい街まで行けば品揃えがいい薬草屋があるそうだ。

古代中国の薬草、すなわち漢方薬については俺も何も分からない。

だから、雫に全て任せることになるが、腹痛に効く薬草や、打撲によく効くものもあるらしい。

多分、漢方薬といえば千年以上も東洋医療の中心で、現代にも使われているからかなりのものだろう。

そして、洛陽に行けばそれらが手に入る。

という訳で俺と隼は街を出ることになった。

出立の日、

大勢の街の人が見送りにきた。

その中で何人もの人が「行かないで欲しい」と言ってくれた。

ほんとに嬉しい限りなのだが、今後の事を考えるとそうはいかない。

その旨を伝え、別れの挨拶をすると、料理屋の店主から明らかに給金以上のお金を貰った。

曰く、そのお金でもっと他の人を救ってくれ、との事だ。

確か、料理屋にそれ程の余裕があったようには思えない。

かなり無理を言って働かして貰っていたし……。

それなのに俺達のためにここまでしてくれるなんて、感謝しきれない。

これは頑張るしかないな、

俺は決意を新たにしてそのお金を受け取った。

ちなみに隼はうれしさでか、今にも泣きそうな顔をしていた。

そして、感謝を込めて別れの挨拶をすると、俺達は洛陽に向かって出発した。

洛陽に着くまでに、俺達はいくつかの村を通り、そこで医療活動をしながら進んだ。

店主に言われたことに思うところがあったようで、いつも以上に雫はやる気たっぷりだったのが印象深かった。

そういえば、その途中で「流離いの名医」と呼ばれている医者のお噂を聞いた。

どうやらその医者は、何所からともなく現れて、賊によって襲われた村を救ったらしい。

そしてその手伝いに、猫耳の少女がいたそうだ。

……まんま、俺のことだな。

村を救ったって言うのは多分、雫の村のことだろうし、猫耳の少女は桂花のことだろう。

いつの間にこんなに広まったんだ？

なんか変な二つ名ままでついているし……。

そのせいで俺が行く村々では、無駄に注目を浴びてしまい動きにくくしょうがなかった。

拳句のはてには、弟子にして欲しいや、ずっとこの村にいて欲しいなどと言われた。

正直に言って、雫以外に弟子をとる気も、一つの村に定住するつもりもない。

なので、勿論全て断らせて貰った。

あと、噂で思い出したのだが、桂花の奴はどうなったのだろう？

荀？だから史実通り無事に曹操に士官できたと思う。

またいつか会えたらいいな。

俺はそこまで思い出したところで、ふうと、一息ついて空を仰ぐ。

頭上には、前いた時代の中国では見ることができないような青く澄んだ空が何所までも広がっている。

空ってこんなに綺麗だったんだな……。

不意にそんなことを思ってしまう。

そして、そんな空の下では人々の活気が溢れ、忙しそうに動いている。

「いい街だな」

門をくぐると同時に、眼前に広がった景色を見て小さく漏らす。

「はい、ほんとにすごいです。」

多分、治めている領主がしっかりした人物なんでしょうね。」

俺の呟きに対応するように雫も小さく返す。

前の街もなかなか賑わっていたと思うが、
ここ洛陽はまさにそれとは格が違う、と言えるほどだ。

それほどまでに栄えていて、尚且つ治安もいい。

聞いたところによると、警備隊がしっかりとしているらしい。

俺たちは威勢のいい宣伝が飛び交う通りを歩いて行く。

「なあ、雫は洛陽に来たことがあるのか？」

「いえ、実際に来るのは初めてですよ。」

噂では聞いていたのですが、実際に見るとやっぱり凄いです！」

俺が聞いてみると、雫は少しはしゃぎ気味で応える。

「あんまりはしゃぐなよ……。」

それにしても、どっか行きたいところでもあるのか？」

「えっ！」

えっと、その、できれば本屋に行ってみたいな。

なんて思っんですけど……」

本屋か、確かにここなら品揃えがいい本屋もありそうだな。

俺も、薬草やこの時代の医療技術、地理関係なども知っておきたいし、一回行ってみるのもいいな。

「本屋か、いいぞ。」

ちょっと落ち着いたら行ってみるか。

俺も調べたいことがあるしな」

俺はそう考えて、許可を出す。

「本当ですか！

やった〜、これであの本も手に入るかも。

あつ、もしかして師匠も一緒に来るんですか？」

それを聞いて喜んだ雫だったが、
何故か恐る恐るそんなことを聞いてきた。

「ん？

俺が行くとなんかまずいのか？」

別に本屋に入店禁止になるようなことはした覚えはないはずだ。

そう思い、聞くと、

「いえ！

決してそういう訳ではないんですけど………」

雫は体の前で手をもじもじさせて、言いくそつにする。

何か言いづらい理由でもあるのか？

あつ、もしかして表沙汰になるとまずい書物があるのかもしれない。

危険思想だ、異端だ、と言われて焚書扱いのものもここにはあってもおかしくない。

雫も徐庶なのだからそういうものを求めるのも普通か……。

なら、これ以上は詮索するべきではないな。

そこまで考えて独りで納得して、うんうんと頷く。

「??？」

あっ！そんなことよりも、

これからどうするんですか？」

雫は思い出したように聞いてくる。

どうやら話を逸らしたみたいだ。

やっぱり、そういう事が。

俺は独り勝手に理解を深めた。

「今後の予定かあ。

どうすつかねえ？」

と、まず何をすべきだろうかと考える。

「どうするって……、
考えてなかったんですか」

そんな俺に呆れたのか、雫は溜息混じりにつぶやく。

そんな「またかあ」みたいな顔するなよ、俺だって少しは考えてんだから。

「大丈夫だ。

こういうのは案外なるようなるもんだぞ。

ほら、ボケつとしないで行くぞ。

ん、何だありゃ？」

俺は軽く言つて、先を急ごうと少し足をはやめたところで前方にある人だかりに気づき、足を止める。

「なんでしようね？」

もしかしてまた、喧嘩でもしてるんですかね？」

雫もそれに気づいたようで、軽く首をかしげる。

もし喧嘩だったら、巻き込まれたくないのだが、人間である故に好奇心というものもある。

額に手を当てて見てみるが人の壁によって思うようには見えない。

なんだろうかと少し考えてみるが、

「考えても仕方無いな。
ちよっと行ってみるか！」

「あつ、待ってくださいよ」

結局、好奇心に負けて、俺は野次馬に行くことにする。

さてと、吉がでるかそれとも凶がでるのか、

俺はそんなことを考えながら走って行った。

第十三話（後書き）

あれは三日前のことでした。

いつものようにパソコンでこの小説を書いていたのですが、

急に停電をして、保存前だった文章が全部吹き飛んじやいました。

その後、ショックで少し立ち直れずこんなに遅くなってしまいました。
た。

今後は気をつけますので、これからもよろしく願います!!

第十四話（前書き）

遅くなりました。

どごぞー！

第十四話

第十四話

秀哉 side

しばらく走るとあまり遠くなかったこともあって、俺はすぐに人混みまで着いた。

そして、半ば強引に体を入れて人混みの中を進み、中心の騒ぎが見える場所まで行く。

そして、少し進んだところで先頭に出たようだ。

そこには、二人の子供と二人の男が立っていた。

その子供の内の少年は馬に乗っており、二人の男とっしょにもう一人の少女に対して向き合っている。

また、あたりには野菜やら芋が散らばっているのも見える。

見ただけじゃ、何があったのか分からないな。

「すみません。」

なにやらまずそうな状況みたいですけど、なにかあったんですか？」

とりあえず隣にいる、肝っ玉母ちゃんという言葉がぴったり合うよ
うな、恰幅の良い女性に状況を聞く。

「なんだい、あんた見てなかったのかい？」

さっきあの女の子が、あの宦官の馬にぶつかっちゃまったんだよ」

女性は簡単に説明をする。

「全く、あの子も災難だね。

宦官に目をつけられるなんて。

最近の宦官は権力を握ったのをいいことにして好き勝手やってるから巻き込まれるのなんて、本当にごめんだよ。

あんたも変な気は起こさない方がいいよ。

宦官に逆らってはこの街じゃ生きていけないからね」

そこまで言うと、女性は疲れたように息を吐いた。

いつの時代でもおばちゃんにはお喋りという属性がついているもの
だろうか、

色々と聞いてないことまで教えてくれた。

しかし、それのおかげで大体の状況は分かった。

俺は改めて騒ぎの中心へと目を向ける。

おそらく、後ろで馬に乗っている少年がその宦官なのだろう。

見た目はどう見ても反抗期すら抜けてない餓鬼なのだが、着ている服が他のものとは違って、凄く高級そうだ。

それに宦官とは、去勢された男性のことだ。

男性は十歳よりも前に、去勢されると、第二次性徴が訪れない。

だから、あんな見た目になるのも想像ができるし納得もできる。

俺はそんなことを考えて、独りでうんうんと頷く。

するとそんな間に、向こうでも動きがあったようで、

「貴様！」

宦官様にぶつかっておいて謝ることもできないのか！

「だから、それについてはさっき謝っただろ。」

あたしは急いでるのだから通してくれよ

「お前、まだそんなこと言うのか。」

あんなので謝ったことになると思っな！」

少女と宦官の従者であろう男が大声で言い合う。

少女は他の街の者達よりも少し汚れた服を着て、すすで汚れてしまった顔の中できりくりした大きな瞳をしっかりと開いている。

二対一、しかも自分よりも明らかに歳上の男に対しても全く気圧されてないところを見ると、この少女はとても気が強いようだ。

「さつきから、此方が優しくしていれば調子に乗りやがって。

これ以上は流石に我慢できんぞ、

早く宦官様に謝れ！」

「もう、何度も謝ったって、言ってるだろう。」

だからいい加減に通してくれよ、母さんが家で待ってるんだ」

いつまでたっても平行線を辿る言い合いに痺れを切らしたのか、男は額に青筋を浮かべながら言う。

だがそれでも少女は、先程までの態度を変えずに言い張る。

拙いな。

俺はそんな様子から嫌な予感を感じる。

「わかった、

貴様がその気なら此方にも考えがある。

後悔しても遅いからな」

男はそう言って、拳を握って少女に向かって振りかぶる。

やっぱり、こうなるのか。

案の定、予想通りの結果になったことに溜息を吐いて止めに入ろうかと動こうとする。

だが、すぐにその必要はなくなった。

「やめる」

小さく呟かれたこの一言によって男は動きを止められた。

そして男はそれを言った自分の主ー宦官に、驚きながら顔を向ける。

俺も意外な人物が止めに入ったことに驚く。

止めたただけだったらいいのだが……また嫌な予感しかないぞ。

「しかし、こいつは趙忠様にぶつかっておいて、謝りもしないのですよ。」

そんなやつを放っておいてもいいのですか?!

「よい、その程度のことと怒るような私では無い。

とは言っても、其奴が下々の身分で私にぶつかったのも事実だ。

それをなかったことにするのは、流石に無理がある。

しかも、

貴様が謝罪として十分な品が渡せるようには見えない……。

そこでだ、娘!

お前にはその分、私の屋敷で働いて返してもらおうことにしよう。

感謝するがいい」

宦官——趙忠は偉そうに言い放ち、男も納得いった様に頷いた。

どうしてこつても悪い予感ばかり

当たるのだろうか?!

俺は、少女を連れて行くこととする二人の従者とその後ろで下卑な笑いを浮かべている趙忠を見て、そんなことを考える。

……あの趙忠ってやつはロリコンみたいだ。

「離せ、

あたしは家に帰らないといけないんだ！」

「趙忠様がお前を雇ってやる、と言っているだ。」

四の五の言わずに着いて来い！」

男達は、少女の腕をつかみ無理矢理に連れて行くこととする。

少女はそれを振り払おうとするが、一介の少女に大人の男を二人も振り払えるわけがない。

少女は抵抗むなしく引っ張られていく。

やれやれ、仕方無い。

止めに入ろうかな。

俺はそう考えて、いつの間にか隣にいたおっさんに、

「警備隊のできるだけ偉い人を連れてきてくれ」と頼む。

おっさんは体をくねくねさせつつ、

「お安いご用よお〜」

と言って、物凄い速度で走って行った。

これでよし。

あとは、頑張って時間稼ぎしますかね。

俺は中央の騒ぎにもう一度目をやると、意を決して足を踏み出した。

少女 side

「やめろ！放せ！」

あたしは腕をふって、掴みかかってくる男達から逃げようとするが、体格の差もありうまくいかない。

本当に今日はずいてない。

いつものように野菜を取ってきたまではよかったのだが、こんなところで宦官にぶつかってしまふなんて。

そのせいで、せっかくの野菜も地面に落ちてしまった。

お母さんに食べさせてあげたかったのに……

本当についてない。

あたしは、手をばたつかせながらもう一度思う。

そんな時、

「おい、太郎。

こんなところでなにしてんだ？」

この状況に不釣り合いな間の抜けた声が聞こえてきた。

見れば、人混みの中をからその声の主であるだろう男が見えた。

男は草の様な柄の服を着て、

白い外套の様なものを羽織っており、何がそんなに気にいらないのだろうか、どうも不機嫌そうな顔をしていた。

一言で言えば、すごく怪しい見た目だ。

白い外套もところどころ破れ、汚れているようだ。

もしかしたら、あたしと同じとこの人かもしれない、

そんなことを思うがすぐに振り払う。

あんな変な格好をした人は今まで見たことがない。

あそこの人なら一回ぐらいは見たことがあるはずだし、それはないか。

そこまで考えると、

「おい、太郎？」

聞いているのか？何があったんだ？」

男は私に近づきながら言ってきた。

え？

太郎ってあたしのことなの？

さっき、男は確かにあたしに向かって言った。

あまりに突然すぎて理解がついていかない。

宦官たちも同じ様で、皆一様に呆然としている。

「おい！聞いてんのか？」

しかし、男はそんなことも全く気にせずに、今度はあたしの肩に手をおいて話してきた。

「あんた、誰だよ？」

それに太郎ってームグッ」

そこでやっとな現実にかえってきたあたしは、男に色々聞こうとする
と、

オトコは急に手をあたしの口に当てて塞いできた。

「ん〜ん〜！」

！！

急な出来事にまた驚いて、

あたしは声にならない悲鳴を上げる。

(しっ、静かに。

今から俺が、お前を助けるために演技をするから、適当に合わせろ。
??????? いいか?)

男は人差し指を口に当てつつ小声でそう言った。

とりあえず、あたし一人ではこの状況をどうしようもできそうにな
い。

なら、この男が協力すると言つのを利用してやればいい。

それに、まずあたしと宦官たちを引き離してこのやりとりがあいつ
らに聞かれない様にしたのをみるとこの男はただの阿呆ではないみ
たいだな。

あたしはそう考えて、こくこくと頷く。

それをみると満足そうな様子で小さく、よし、と言つと男は、

「ふむふむ、なになに、
この道を歩いてたら、自分の不注意で宦官様にぶつかってしまっ
たのか」

と独りでなにかを言い出した。

このあとの男の行動に、先程同意をしてしまった自分を殺したくない
のを、この時のあたしはまだ知るよしかなかった。

第十四話（後書き）

変なところで切れますが、勘弁してください。

第十五話

第十五話

少女 side

「ふむふむ、なになに、
ここの道を歩いてたら、自分の不注意で宦官様にぶつかってしまっ
たのか」

男は独りで勝手に話しだした。

色々と言いたい内容だけど、

それもこいつの演技の内だろうと思って我慢しよう。

「いや、それよりもお前は誰なんだ？」

さっきまで、私の腕を握っていた従者が聞く。

こいつが何者なのか、

不本意だがあたしも全く同じ疑問を考えていた。

協力すると言ったが、いきなり現れたこの男のことをあたしも全く

知らない。

なので、あたしもその従者と一緒に男の発言を聞こうと耳を傾ける。

「おっと、これは失礼いたしました。

俺……私はその太郎の兄です。

お見知りおきを」

！！　？あたしはあまりにも衝撃的な発言に内心で吹き出す。

……決して表には見せないが。

あんたがあたしの兄貴だつて？！

もちろん兄貴なんてあたしには存在しない。

いくら演技にしても設定が突飛
過ぎるだろ。

そう思つてはあ、と溜息を吐く。

「お前、そいつの兄なのか？」

従者も驚いた様で聞き返す。

「ええ、そうです。

?? ? ? ? ? ? ?

この度は私の弟の太郎がご迷惑をかけた様ですみません。

兄の私からこの愚弟には充分に言っておきます」

!! ?あたしはもう一度吹き出しそうになる。

今度はあたしの兄を名乗るだけでなく、
あたしのことを弟とまで言い出した。

周りにいる群衆もこれには驚いたのか少し騒ぎだした。

ふざけるな!

あたしはこんな喋り方だけど立派な女だ!

あたしはそう思って、

「おい!あんた何言ってる……ひっ?」

抗議しようと男に話しかけようとするが、睨まれて目で制されてし

まう。

そのせいで、あたしの口からはそれ以上の抗議の言葉はでてこなかった。

べ、別にびびったわけじゃないぞ。

……ただ、少しだけ怖かったただけだもん。

仕方ない、これは演技なんだ……と自分に言い聞かせる。

そんな感じで、抗議することはかなわず話は進んでいく。

「弟、だと?」

いち早くそう聞いてきたのは、従者達の後ろで馬に乗っている宦官だった。

「ん?

そうですけど一体どうなされたのですか?」

男は何に驚いているのかわかっているであろうのに、あからさまな態度で聞く。

どうやらこいつの中であたしは弟という設定で決まっちゃってしまっているらしい。

うう、あたしは女なのに……。

それが悲しくて、

あたしは小さく頭を垂れて落ち込む。

「そんな見た目で男だと……。
信じられん」

宦官はもう一度驚きながら言った。

その言葉にあたしは不覚にも喜んでしまう。

信じないでいい！

これで、男って思われたらあたしは……。

あたしはそう思いながら成り行きを見守る。

「何を言つんですか。

こいつが女？、

そんなわけないじゃないですか」

男はさも当たり前のように言って、私の心をずかずかと削る。
そんなにはつきり言わなくてもいいじゃないか。

「いや、だが……」

宦官はまだ信じられないようで、齒切れの悪い言葉を出す。

「はあ、わかりました」

そんな宦官に呆れたように、

男は溜息混じりに言うと、くるりと反転してあたしを指差す。

なにか嫌な予感が……。

あたしはそんな気がして先に男に話しかけようとするが、
次の瞬間、

「見てください！？こいつの胸を。」

いくら小さいと言っても、女性ならもう少しはあるでしょう。

このぺったんこの胸を見てもまだ、こいつが女と言えますか？」

男ははつきりと言いつつ切った。

!!!!!! えっ？

今、こいつはなんて言った？
あたしの胸が小さいだって？
て

た、確かに百歩譲って、あたしの胸は小さいさ。

で、でもさそんなにはつきりと言わないでもてもいいじゃないか！

あたしは今度こそ抗議の視線を男に送る。

しかしそれでも男はどこに吹く風、といった具合に此方には目をくれない。

「それに宦官様のような方には、うちの弟では吊り合いません。

こんな弟を連れて行けば、宦官様の風評が下がるだけですよ」「

そう、続けて言った。

あたしは男のそんな態度と言葉に悔しくなって、少し涙目になって男を睨む。

「う、うむ……、確かにそうだな」

宦官は戸惑いながら同意を示した。

本当なら叫びだしたい所だが、今はそれよりも目の前のこの男をどうやってぶん殴るかを考える方が重要だ。

いくら演技と言ってもここまで好き勝手言われて黙っていられるか！

あたしはそうして決意を固めるのだった。

第十五話（後書き）

だめだ、うまくかけない……。。

こんな駄文ですがよろしくお願いします。

第十六話 前編 (閑話) (前書き)

遅くなりほんとうすみません!!

第十六話 前編 (閑話)

噂、

それは常に形を変えるもの。

伝える人によつて内容が抜けたり、誇張されたりして伝わっていく。同じ内容でも人の数だけ形がある。

そして、それは時には人の役に立ち、時には厄介なことこの上ないものになるのである。

少し前――秀哉達が洛陽に向かつている時、

霸王、曹操が納める陳留の城の玉座の間に佇む四人の人影。

一人は言わずもがこの部屋の主で先程でた曹操。

そして玉座に座る曹操の両脇には夏侯惇、夏侯淵が佇む。

玉座から三人が見下ろす先にいるのは、先の戦で功績をあげて軍師として曹操に仕えることになった荀？。

その荀？を見る曹操達の視線は厳しく、玉座の間の内装とあわさって張り詰めた空気が部屋に流れる。

……ここまでならば厳肅な様子が想像されるのだが、荀？が縄で縛られて若干涙目であることでその雰囲気は台無しだ。

「さて桂花、もう逃げられないわよ。
そろそろ話す気になったかしら？」

そんな奇妙な空気の中一番に口を開いたのは玉座に座る曹操。

しかし、優しい口調だが、目は笑っておらず不機嫌なのがまるわかりだ。

「うう、分かりました、華琳様。」

その不機嫌な主の言葉を受けた荀？は小さく呻くように返す。

そもそもなぜこのような状況になったかと言つと、話は少し前に遡る。

~~~~~

~~~~~

~~~~~

）

まだ日が登らない今朝早く、荀？は自室の寝台の中でうずくまって全く起きる様子もなく、ぐっすり寝ている。

晴れて曹操軍の軍師となった荀？だが、慣れない環境と現在、曹操軍には軍師が荀？一人しかいなく、必然的に荀？に仕事が集まることもあって、疲れがたまっているのだろう。

最近黄巾党の動きも活発になってきたために、余計にだ。

そんな訳で荀？は小さく寝息を漏らして気持ちよさそうに寝ているのだ。

しかし、

「荀？様、早朝から失礼します。　？お起きでしょうか？」

その束の間の安眠も部屋の外から聞こえる侍女の声によって終わりを迎えた。

「……なに？」

荀？は寝台から出ず、扉越しで返事をする。

その顔には「こんな早くからなんだ？！」と言いたそうに不快な表情が張り付いている。

「はい、曹操様からの伝言を預かっています。

この後、着替えて玉座の間に来てくれとのことですよ」

とは言っても、扉の向こうにいる侍女にその表情は見えないわけで、淡々と伝言を伝える。

華琳様が？

こんな早くからなにかしら？

荀？はそう思い、自らが敬愛してやまない主を思い浮かべる。

もしかして、こんな早くから……！！

ああ、華琳様あゝ。

苟？はなにを想像したのか、頬を少し染めて一人で寝台の中で悶え始める。

一人で急に悶え出した少女、？？こんなものを第三者がみたらどん引きしても仕方ないだろう。

まあ、ここは個室なのでその心配はほとんどないが。

「あの、苟？様？

聞いていらっしやいますか？」

しばらくしてから、苟？からの返事がないことに心配した侍女が声をかける。

「……………！！

大丈夫よ。問題ないわ」

その声でようやく我に返ったのか、慌てたように返す。

「そういえば、華琳様は他になにか言ってみえたの？」

そして直ぐに次の言葉をつなげた。

しかし苟？が嬉々としながら聞いているのをみれば、先程までの妄想が頭の中にあるのがばればれた。

しかし、

「あっ、そういえば。最近噂になっている「流離いの名医」について聞きたいことがある。とも言ってみえました」

その幻想は直ぐに粉々に壊された。

侍女のその言葉は苟？を焦らせるのに充分だった。

「流離いの名医」。

最近、巷で噂になっているものだ。

なんでも、邑から邑へと渡り歩き、格安で病人や怪我人を治療している凄腕の医者がある、とのことだ。

苟？は直ぐに寝起きの頭を奮い起こして、思考する。

（この「流離いの名医」ってのは十中八九で“あいつ”のことだろう。

見た目の噂もあってるし……。

でも、どうしてばれたの？

こっちに来てから華琳様にあいつについて話した覚えはない。

それに一度、話にでた時は知らないところまかしたはずだ。  
ばれるような要素はなかったと思う)

そこまで考えた荀？だが、出た答えは全て予想でしかなく確証がない。  
つまり、いくら考えても意味がないのだ。

なので荀？は直ぐに思考を切り替えて、これをどう乗り切るのかを  
考え始めた。

この切り替えの早さは流石、と言っべきだろう。

そもそも、何故荀？がここまで秀哉との関係がばれるの恐れている  
かと言うと、

その原因は荀？と出会う前に秀哉が行ったことにある。

荀？はここに来てから知ったのだが、秀哉は以前黄巾党にいたらしい。  
い。

そして本当に一時的ではあったが、曹操とは敵対関係であった。

ここまで書けばもうわかると思うが、そんな元黄巾党の男と一緒にいたなんてことがばれるのは百害あって一利なしだ。特に曹操軍の中ではまだ新参者の部類に入る荀？にとってはそれはより顕著だ。

（別れてからもこんなに迷惑かけるなんて、ほんと最低な奴ね！

……まあ、あの全身精液男よりはマシでしょうけど。  
今度あつたら絶対に食事の一つくらい奢らせてやるわ！）

考えをまとめた荀？は直ぐに着替えを済ませて、そんなことを考えながら部屋をでた。

荀？が部屋を出ると、入り口では侍女が待っていました、と言わんばかりに

こちらです、と案内をする。

荀？は、ありがとう、と軽く告げると前に行く侍女の背中について行く。

それと同時に、頭の中では先程まとめた考えを確認する。

荀？の方針はこうだ。

もし、ただ一軍師として意見を求められるなら全く問題ない。  
これまでのように誤魔化せばいい。

だが、こんな時間に呼び出された時点でその可能性は低いと荀？は考える。

つまり、ある程度なにかつながらがあると、ばれているだろう。

まあ、荀？が南皮からやって来た通り道の村から広がった噂だからそれは仕方ない。

とは言っても、荀？が秀哉と一緒に行動していた事がばれるわけにはいかない。

なので、その場合は敢えて否定せずに面識がある事を認める。立ち寄った村で会って少し話したことにするつもりだ。

噂からもわかるような事と、ばれても当たり障りのない事を織り交ぜて話せば信憑性は高く感じさせられる、と荀？は考えたのだ。

主に嘘をつくのは気が引けるが、それ以上に男に命を助けられ、共に行動していたなんて知られるのはどうしても避けたい。

そのためならば、と言いつつ訳を考えたところでどうやら玉座の間に着いたようだ。

侍女は、失礼しますと、だけ言うと一礼して去っていった。

そこで荀？は一息はいてから目の前の扉に向き直る。

心なしか扉がいつもより大きく見えるのは気のせいだろうか。

暫くしてから、よし、と言って荀？は扉に手をかけた。

もし、予想から多少ずれてもそこは臨機応変に対応すればいい。苟？はそれができるだけの頭脳が自分にはあると自負している。下手に慌てては相手に疑いを与えるだけだ。

なので、なにも緊張することなく普段道理の装いで中へ入っていった。

そう、この時は自分が聞いていた噂はある重要な一文が抜けているなんて知るはずもなかった……。

ただ、運が悪かったのだろう。

第十六話 前編 (閑話) (後書き)

後編も今週中に投稿したいと思います。

第十六話 後編 (閑話) (前書き)

最近、忙しすぎる……。

第十六話 後編（閑話）

荀？が扉を開けると、そこには予想通りといえればいいのだろうか、王座に座る主と、その両脇に控える側近達がいた。

「遅くなり申し訳ありません、華琳様」

荀？はその前まで進み出ると、しゃがんで臣下の礼をとる。その動作はいつたって自然体であり、流石といった様子だ。

「いえ、こつちこそこんな朝早くから悪かったわね、桂花。

それと、さほど重要な話ではないからそんなに畏らなくていいわよ」

しかし、そんな畏まった態度の荀？とは对象的に王座に座る曹操は軽い口調で返す。

「はっ」

曹操がそこまで言うと、荀？は臣下の礼を解き、立ち上がりもう一度曹操に目を向けてから、

「それでは、話とは一体なんでしょうか？」

と早速話の本題について尋ねた。

先程曹操は重要な話ではない、と言ったが、それならばこんな朝早くに呼ぶわけがない。

つまり、それだけ話であるのは間違いないのだろう。

そう考えた荀？は礼は解いても警戒を解かないで、主の返答を待った。

勿論、警戒している様子などは表には出さない様に注意を払う。

「ええ、話と言うのは前にも一度、聞いたことがあったと思うのだがけれど今、巷で噂になっている“流離いの名医”についてよ」

曹操はなお軽い口調で答えた。

それは、荀？にとって予想通りの展開であって、さほど驚きはない。それよりも、この後の方が大切なのだ。

主である曹操がそれについてどこまでの情報を掴んでいるのか？、それが分からなければこちらから下手な発言はできない。

「“流離いの名医”、ですか？」

聞き返す様なことではないが、

荀？は当たり前障りがないようにわざと少し驚いた風に聞き返す。

「そうよ。」

前にも話したように、そいつについての情報を集めているのだけどもなかなかいい情報がないのよ。

分かっているのは、各地を放浪しながら治療をしている男、というくらいね。

桂花はあれから何か聞かなかったかしら？」

曹操は少し困ったような素振りをしながら聞く。

それを聞いた荀？は、内心でよしっ、と微笑んだ。

この言葉通りなら曹操にはまではばれていないことになる。

それならば今後の対応もかなり楽に済ませられるだろう。

一気に肩の荷がおりた気がして荀？はばれないように小さく息をついた。

そして、わざと少し考えるような素振りをしてから

「申し訳ありません、前にも言った通り、その者の噂は聞いておりません」

荀？は申し訳なさそうに頭を下げながら言う。

下げたことによって見えなくなった表情には安堵が張り付いているが、少し上にいる曹操達からはみえていない。

「そう……。」

桂花は、“知らない”のね？」

知らない、  
荀？が言ったその言葉を何故か強調するようにして、曹操は残念そうに確認をとる。

いつもの荀？ならこの言葉に違和感を感じていたかもしれないが、あいにくと今の荀？は安心したせいかな、そんなことにすら気づけない。

それが、荀？の最大の失敗だったのであろう。

「お役に立てず、すみません。」

では、私はこれで失礼させていただきます」

と言って、さっさと回れ右をして扉へ向かおうとする荀？。

このまま部屋を出て、何事も無かったかの様に済めばよかったのだが、そうはうまくいかない。

「ええ、時間をとらせて悪かったわ。」

でも、最後に一つだけいいかしら？」

扉に向かって一步を踏み出そうとした荀？は足を止め、そして、なんだらう？、と不思議そうに顔を向けた。

それを確認してから、曹操は口を開いて、

「この際だからはっきり言っわ。

桂花、私はね……………」

そこまで言って、一度言葉を切る曹操。

そんな曹操に荀？はなにか言葉にできない危機感を感じ取り、生唾を飲み込んだ。

そして、まずい！と思った荀？は先に口を開こうとするが、それは叶わず、

「？嘘が大嫌いなのか」

先程までとはまるで違う、突き刺さる様な声で言い放った。表情もうつてかわって真剣なそれだ。

その一言は、荀？の顔を青ざめさせるには充分すぎて玉座の間には一瞬の静寂が流れる。

ほんの数秒だったであろうその静寂は荀？には永久の様に感じられたが、なんとか落ち着いて返そうとして、

「い、いつたい、な、なんなんのことでしょうか？」

無理だった。

はたからみると、裏返って震えたその声は単に嘘の自白にしか聞こえない。

そんな荀？に夏侯惇、夏侯淵の二人が哀れむ様な目を向けるが今の荀？にはそんなことに気づく余裕など無い。

「あら？」

此の後に及んでまだ、隠そうとするのか？

もう一度言つわよ、桂花。

私は、嘘と騙されるのが大嫌いなのだ

そんな荀？を曹操は嬉々としてさらに責め立てる。

しかしその顔は笑っているが、その目は全く笑っていない。

そんな表情は普通に怒るよりも何倍も不気味にみえてしまう。

そして、周りには、怒ってます、と言わんばかりのオーラを纏って  
いおり、それらを一拳に向けられた荀？は、

「あうう〜」

小さく呻くことしかできない。

かの霸王、曹操に真正面からこれほどの覇気をぶつけられてもなお、  
毅然としていられる者は稀有だろう。

今回ことは明らかに荀？の失敗であった。

曹操がどこまで知っているのかを知ろうとしてした応答は結果として  
全て後手にまわってしまっただ。

この様子から、明らかに秀哉との関係はばれてしまっているのだろ  
う。

こうなつてはいくら名軍師と言えど、挽回はできそうにない。

しかし、そこまで考えたところで荀？の中に一つの疑問が出て来た。  
それは、

華琳様はどこでそれを知ったのか？

前の賊に襲われた村は自分の管理にさせてもらい、外に情報が漏れない様に気を付けた。

それに村の者にはできる限り口止めして華琳様の耳には入らない様に特に気を付けたはずだ。

早々簡単にはれないと思っていたのだけど……………。

そんなことを苟？が考えると、

「この状況で考えごととはなかなかの余裕じゃない、桂花。

ふうん、……………なんで私が知ってるのか？と聞きたげな顔ね」

見下ろすような視線のまま曹操は存外に言い放つ。

そんな様子を見た苟？は全て見透かされてしまった様に思えて、さらに慌ててしまう。

「いいわ、教えてあげる」

荀？の慌てように満足したのか、曹操は鼻をならした後、話し出した。

その内容は、荀？にとって先程から聞きたい物であり、直ぐに表情を引き締めると曹操の次を待つ。

「昨日あなたも知っているとおもうけど、城下に行商人の一団が来たの、

それで私が城下の視察に出た時に彼等と会って、話す機会があったのだけれど、

その行商人の中の一人が面白いことを言ったの……………」

そこまで言うと、一度、荀？に笑顔を向けてから次の言葉を紡ぐ。

「その男の言によると、

『流離いの名医の傍には猫の耳を模した様な外套を被った少女がいた』

らしいのよ」

ここまで聞いたところで、この軍師は全てを悟った。

華琳様はもう自分とあの男が関係あり、と知っていたのだ。

今から思えば先程までのわざとらしい態度は自分を試していたのだらう。

嘘をつき誤魔化し切ろうとするのか、否か。

そして案の定、荀？は曹操の期待を裏切る形となってしまった。

曹操はまだこのことを知るはずがない、として誤魔化そうとしたのだ。

己の主に隠し事をするだけでなく、あまつさえ騙そうとまでしたのだ。

これが、裏切りでないことがあるのか。

そこまで考えれば、今後、自分に下される処分を思い描いてしまい、荀？は徐々に青ざめていく。

そして同時に助けを求めようとあたりに目をやる。

この部屋の中にいるのは、四人。その中で助けを求められそうな人物は……………。

曹操、は当時者のため論外だ。ならばと荀？は次の人物に目をやる。

曹操の右隣にいる黒髪の女性――夏侯惇……………も論外。

理由は言わずもがな、と言うやつだ。

そして次の人物、まあ消去法で最後の人物で、この中では一番、助けを期待できる青髪の女性――夏侯淵に目を向けた。

精一杯に少し潤んだ目で夏侯淵に助けを求める荀？。今の彼女の姿は、普段の彼女を知る者なら驚きを禁じえないはずだ。特に、かの天の御遣いが見れば「ついにデレた?!」などと口走りそうである。

そんな目を向けられた夏侯淵は少し驚いた様な顔をしたが、直ぐになにかを口パクで伝えようとした。

荀？は読唇術を心得ているわけではない。しかし、なぜたろうかそれでも夏侯淵が何を言おうとしているかははっきりと分かったようだ。

――あきらめる。 と……

短くもはっきりと伝わったその言葉は荀？にしてみれば、死刑宣告に等しいものだったかもしれない。

かくして、最後の頼みの綱を失った荀？に為すべき術はなくなり、ただ黙ることしかできなくなった。

「あら、桂花。」

さっきから黙っているけど、なにか弁明することはないの？」

曹操は心底楽しそうにそう告げる。

おそらく、全てを見透かした上でいっているのだから質が悪い。

「まあ、この曹孟徳を一度ならずも、“二度”騙そうとしたのだし、弁明できるわけないわよね」

次々と言葉を紡ぐ曹操。

その言葉は的確に、そして確実に荀？を追い詰めていく。

そして、荀？はあううと呻くことしかできない。

「さて、聡明なあなたのことだから今私が何を考えているのか大体の予想はできるわよね？」

荀文若、これだけのことをしたのだから……………」

—————覚悟はできてるわよね？

「あう〜、すっ、すみません〜!!」

「あつ、逃げた」

曹操が止めを刺すのと、ほぼ同時に泣きながら荀?は逃亡した。その速度はまさしく神速と言えるものだろう。夏侯淵が誰ともなくつぶやく間にもう部屋から出ようとしたのだから。

しかし、それをやすやすと見逃す曹孟徳ではない。

「あつ、待ちなさい、桂花!!」

春蘭、秋蘭、直ぐに捕まえなさい!!」

「はっ」

「……………御意」

直ぐに傍の二人に命令を下す曹操。

それに間髪入れずに返事をし、やる気満々で荀?に追いかけて出す夏侯惇。それをみて、やれやれと呆れながらもそんな姉を追う夏侯淵

そして、そんな二人も部屋を出ていき、曹操は一人部屋に残された。

「ふう。ちょっといじめすぎたかしら？」

後悔を示すようなその言葉を言った曹操の顔はやはり、といえはいのか笑っていたのだった。

「それにしても、逃げ出すとは流石に予想外ね」

曹操のその呟きは誰もいない部屋にかき消されるだけだった。

そして、話は前話の冒頭に戻る。

曹操の前には、縄で縛られた荀？が跪いている。いや、されていると言つべきかもしれないが。

文官である荀？が武官である二人から逃げ切れるわけがなく、直ぐに捕まり今に至るわけだが。

それにしても……

「わざわざ、縛る必要があるのか、姉者？」

「む、秋蘭。

これはだな、日頃の恨……ではなく、また逃げ出さないように必要なんだ」

とまあ、なんとも個人的な理由で縛られているわけだ。

そんな春蘭を荀？は精一杯睨みつけるが、当の本人は名に食わぬ顔で斜め右上を見つめて誤魔化すだけだ。

「さて桂花、もう逃げられないわよ。

そろそろ話す気になったかしら？」

そんな荀？にはおかまいなしに、曹操は口を開く。

「うう、分かりました、華琳様。」

荀？は主人の方へと目を向け直すと遂に観念したように話し出した。

こんなことになった原因を作った人物について……。

「ふむ、成る程ね……」

荀?が話すのを聞いて、曹操は考えるように顎に手を当てて呟く。  
荀?の話に依れば、

曰く、流離いの名医は噂通り男である。

曰く、自分は一度、命を助けてもらったこと。

曰く、聞いた事もないような医学を知っているということ。

「聞いた限りでは、五斗米道でも内容だし、益々気になるわね。

一度、一刀にも聞いてみようかしら……」

曹操は次々と思考を巡らす。

「わざわざ、桂花が庇おうとまでした男ですし、確かに気になりませんが」

夏侯淵が対応するようにそう言うと、荀？はそれを否定しようとして、んん〜と唸る。

どうやら荀？が話し終わってから、いつの間にか夏侯惇が猿轡をしたように声を出せずにいるみたいだ。

「それに、桂花を助けてもらった礼もしないといけない。

どっちにしても一度会ってみたいわね」

「しかし、桂花が言う村にはもういないようですし、その後の足取りも分からない今では捜し用がありません」

「そうなのよね。

でもまあ、この乱世なら遠からず出会っことになるでしょう。

その時を待つしかないわね」

そう言いながらも、笑う曹操はその出会いを確信しているようにも見えた。

そして、話しが大体まとまったところで、

「姉者、流石にそれぐらいにしといたらどうだ？」

夏侯淵は未だに荀？をいじめ続ける姉を諫めるように言う。

「しかし、秋蘭。

こんな機会、二度と無いかもしれないんだぞ」

そんな姉に対して、遂に欲望を隠すことなく言う夏侯惇。

そんな夏侯惇を荀？は親の仇の様に睨むがそんな物が猛将に効くはずがない。

「そうよ、春蘭。

そろそろやめてあげなさい」

そんな様子を見た曹操も、夏侯惇を止める。

尤も、こちらは夏侯淵の様に荀？を哀れに思いそう言ったわけでは決していないのだが……。

「しかし、華琳様……」

未だに名残惜しそうに言う夏侯惇。

しかし、主人の命令は絶対であり逆らえる物ではない。  
だから、このまま行けば助かりそうな荀？なのだが、なにか嫌な予  
感がして冷や汗が止まらない。

そして流石は王佐の才、その予想は的中した。

夏侯惇に曹操は笑いかけながら、

「大丈夫よ、春蘭。

後は私がたっぷりとお仕置してあげるから」

本来なら曹操のお仕置と言えば、喜ばしいと思う曹操軍なのだが…

……

ちよつとまで、それでいいのか、曹操軍!!

……ゴホン、閑話休題。

とにかく、今回は少し違うことが、ここにいる四人には伝わったの  
だろう。

夏侯惇は目を輝かせて、頷き、夏侯淵は荀？に哀れみの目に向ける。  
そして、荀？と言えば真つ青になり、少し震えている様だ。その心  
臓は破裂しんばかりにドクドクいつている。

「男の文官の質問せめにしていいのだけれど、今回は……………」

ここで曹操は一度考える様な素振りをして、

「そうねたしか一刀は今、留守だったわよね。

なら、その格好のまま一刀の部屋に置いておきなさい」

本当の死刑宣告をした。

れそれを聞いた荀？は、

「んんん、んっ……………！！！！（いやああ〜、孕ませられる！  
！！！！）」

声になってない、叫びをするだけだった。

そして直ぐに、それは名案！と言わんばかりの夏侯惇に連れていか  
れるのだった。

そんな二人が去り、静かになった部屋で曹操は、

「さて、絶対に見つけてあげるから待ってなさい！　？　桐島！」

と言い　それを、また悪い癖が……と夏侯淵は呆れるのだった。

そしてその日の夕刻、天の御遣いの部屋から、

「なっ、なんじゃこりゃあ~~~~!!!!」

と響き渡ったのは、想像に難くない。

と付け加えておこう。

かくして、両者の邂逅は近いのかもしれない……………。

第十七話（前書き）

遅くなりすみません。

## 第十七話

洛陽の街。

後漢の都であるその街の大通りは広く、馬車が二台すれ違うには十分な幅である。

そんな通りが人で埋まるほど、野次馬が集まっているのだ。その中心にいる者はさぞ、注目されるだろう………

とまあ、他人事の様になってみたが、その中心にいるのが俺だからこれが笑えない。

他人事なら傍観できたのだが、一度、首を突っ込んでしまった以上後へは引けず、とにかく頑張るしかない。

「すみません。弟の失態は、兄である私の失態に他ありません。心よりお詫び申し上げます」

俺は心にもない言葉を整然と並べたて、頭を下げる。  
それと同時に隣の“少女”頭にも手を当てて下げさせた。

「あつ、ああ」

そんな俺たちに対して宦官は未だにショックから立ち直っていないのか、どこか上の空のように生返事を返す。

これはチャンスだ。

今の宦官の状態なら謝り通して、向こうが訳の分からないうちにそそくさと立ち去ればいい。

何の問題もない。

だから俺はあえて言おう完璧である、と。

この調子にいけば全て丸く収まる……………はずだったのだが、

「おい、さっきから黙ってるけどなんか言ったらどうなんだ?!」

「そっだ！」

これは一体どう言う事なのか説明してもらおうか?」

あれからしばらく経った今、俺の前には顔を真っ赤にしながらい寄ってくる件の少女と、これまた同じく寄ってくる宦官がいる。

……………どうしてこうなったんだ?

少女の顔が赤いのは明らかに羞恥などではなく、激しい憤怒のものでありこちらに明確な敵意を向けているのが分かる。

とは言え、“顔を紅潮させる”ことはその理由が羞恥であれ、憤怒であれ、起こるメカニズムは同じである。

人が怒ったり、恥ずかしがるなどの感情になった際、それにより自律神経が作用して血管が拡張することで顔が赤く見えるようになるのが紅潮した状態だ。

でも、

「まあ、今はそんなことどうでもいいか」

「!!… どうでもいいってどう言うことだよ?!」

俺は頭に浮かんだ場違いな見識を一蹴したのだが、どうやら声となってしまうたらしく火に油をそそぐ形となってしまった。

「いや、こつちの話だ、気にしないでくれ」

そういつて少女達に掌を向けるが怒りが収まる様子は……………全くない。

なんだか頭が痛くなってきた。

ふと、人混みに目を向けると視界の端に「ひゃわわ……………」といいながら、狼狽えている雫が映る。

とりあえずお前は落ち着いてくれ。

それにしても、怒りを向けている少女にしても宦官にしても、本人は真剣なつもりかもしれないが、どうみても精々子供が駄々をこねているようにしか見えず、どこか微笑ましくある。

こんなこと言えば、さらに怒るだろうが。

だから、怖さや威圧感のようなものは皆無なのだが頭痛の種はそこではない。

俺が思っているのは、

どうして、さっきまでいがみ合ってたあんたらが今は協力して俺に詰め寄ってくるんだ？！

呉越同舟にも程がある。

そう思い、現在ここに至った経緯をもう一度思い出してみる。

まず、

少女を謝らせようとする　少女は動かない　不思議に思い顔を覗き込む　その瞬間に少女から盛大な頭突きをくらい、怒る  
宦官も嘘に気付き、怒る。

要約するとこんな具合で今に至ったわけだ。

ここまで思い出してしまうと、先程頭突きを受けた額のあたりが痛くなってくるのを感じる。

確認はしていないが腫れ上がっているかもしれない。それほど盛大な頭突きだった。

「大体、人のことを男扱いして無理矢理謝らせようとした拳げ句に話すらまとも聞いていないなんて。あたしを舐めてんのか？」

少女はさらに不機嫌そうになって言う。

確かに、男扱いしたのは悪いと思う。  
それに言い訳かもしれないが後でそれについて謝罪をしようとも思っていたし。

だからできるのなら諸々の事情を踏まえた上で抗議をするのは宦官も去った後にして欲しかった。

演技だつても伝えていたから大丈夫だろうと踏んでいたのだが………失敗したな。

この少女の年頃ならちょうどそういった性差を過敏に意識し出す頃でもある。

我慢しろ！と言う方が酷だったのかもしれない。

どれも今となつては詮なきことだが。

「貴様、民草の分際で宦官であるこの私、趙忠を欺こうとしたのだ。それ相応の覚悟はあるのであるうな」

宦官——趙忠も少女に続くように言う。

どうやら今は少女についての考察などしている場合ではないようだ。まずはちっこい二人に言い寄られるという珍妙なこの状況をどうにかしないといけない。

まあ、どうにかするといつてもこうなってしまった以上とうぜんだが、俺にとれる策は一個しかない。

それは一番の上策でもあると俺は信じている。

しかし、その策を用いるにはタイミングが重要になってくる。

その機会を待つために、俺は肩透かしのように時間を稼ぐのだった

……。

それからどれ程が経っただろうか、あれから俺は少女の怒りの矛先に紙一重でかわしつつ、時間をかせいでいたのだが、流石に少女はもう我慢ならないという様子になってきた。

これ以上は厳しいか？

そんな風に俺は考え出したのだが、

「ちょっと通してくれるか？」

そんな時、人混みからそんな声が聞こえてきた。

これはおそらく事前に呼んでもらった警備隊の人であろう。

袴？のようなものを履き、胸にはさらしを巻くというなかなか大胆な格好をしている人が人混みを掻き分けて此方にくるのが分かる。

319

好機は……………今！

俺は目を光らせると直ぐに動き出した。

「あんたら、こんな真つ昼間から往来でなにしとん」すまん！あと  
は任せた！」ね……………ん？  
つて、どう意味やそれ?!」

「あつ、勝手に逃げるな!!」

警備隊であろう女性が言い終えるとほぼ同時に俺は彼女にそう告げると、脱兎も真つ青になるような速さで駆け出した。後ろから呼び止めるような少女の怒鳴り声も聞こえるがそんなの知ったことじゃない。

あとの処理は今来た警備隊の人に丸投げして、俺はとんずらこかせてもらおう。

無責任だ、と言われるかもしれないが仕方ないだろ。

こんな状況になってしまった以上、俺にできることはない。

そもそも、始めから警備隊の人が来るまで時間を稼ぐことが目的であつたのだから、少々ミスはあつたもののその目的は充分に果たされたはずだ。

警備隊の目の前で誘拐などいくら宦官と言えどもできないから、あの少女がまた連れていかれるようなことにはならないはずだ。

だから、俺の働きは決して無駄ではなかった……はず。

それよりもこの後、雫とどうやって合流するかを考えないといけない。

やはりまともな連絡手段がないというのは困り物だな。

どうしたものかね？

そんな風に考えごとをしつつ走っていたせいだろうか、俺は後ろに迫る小さな影に気が付かないのであった。

第十七話（後書き）

短くてすみません。

次話は三月中にあげたいとおもいます。

## 第十八話

物事が上手くいっている時は何をしても上手くいく。

つまり、調子がいい時は何事も上手くいく。という言葉がある。

これは経験則でしかないが、俺は正しいと断言できると思う。  
事実、こういった状態を俺は何度か経験したことがある。

しかし、それが真実であればその逆もまた然りである。

ー上手くないかない時は、とことん上手くないかなー

洛陽の大通りから少し離れた街中の小さな裏通りで俺は小さく溜息を吐く。そして、その元凶とも言える人ー俺の目の前で大きく肩で息をしながら辛そうにする少女に目を向ける。

どうも、あそこからおれが逃げた後にわざわざ追いかけてくれたようだ。迷惑このうえないが。

別に振り切ることでもできたが、泣きそうになるくらい辛そうなのに、「待つ………て………」と懸命に追いかける姿を見ると少し心が痛み、できなかつた。

「大丈夫か？」

俺は少女に声をかけて見るが少女からの返事はなく、ハアハアと荒い息遣いが聞こえるだけだ。

まあ、無理もないか。

自慢ではないが、俺は体力はかなりある方だと思う。S A Sの入隊マラソンですら合格できる自信もある。

そんな俺の走りに、軽かったとは言えついて来たのだ、少女の疲れは大変なものだろう。

「ほれ、水だ。」

「とりあえず飲んどけ」

とりあえず、俺は少女の方に持っていた竹の水筒を転がしてやる。

「あ、り……がと」

途切れ、途切れにだが少女は御礼をいうとすぐにそれを拾い、凄い勢いで中の水を飲み始めた。

この少女、素直に礼を言ったところを見ると根は優しい性格なのだろうな。

なら尚更、ここで放っておくわけにはいかないか……。

あまり、“こつち”に来てまでこんなことはしたくなかったんだが、ここまで来たら仕方ない、と、

俺はさらに厄介事に関わることを覚悟するのだった。

「プファ！ ああ、生き返った。  
ありがとうな」

「いや、どういたしまして。  
それよりも態々、追いかけて来て何か俺に用があるのか？」

少女は笑顔で空になった水筒を此方に投げ返しながら再び御礼を言った。

ともすれば、和やかになりそうだった空気を俺は敢えて崩し、少女に本題に入るように促す。

覚悟を決めた以上は此方としてもあまり時間は取りたくない。

「え？……………ああ！！  
そうだった！

やい、あんた！よくもあたしを弟なんていつてくれたな！」

俺に話を振られたのは予想外だったのか、それとただ単に忘れていただけなのか、少女は少し呆けてから急に大声を上げて文句を言ってきた。

「それに、あたしは悪くないって言うてるのに無理に謝らせようとするし、折角手に入れた野菜も無くしちまうし、どうしてくれんだ！」

「成る程、俺がお前を男扱いして、無理矢理謝らせようとしたのが気に食わなかったんだな？」

「うっ…そ、そうだよ！」

文句を言う少女に対して俺は確認を述べて見つめると、何故か少女は怯えたようにしながら同意を示した。

特に睨んだわけではないんだが、少し傷つくな。

「そうか、だったら……」

俺はそう言って少し間をとってから、

「すまなかった」

――頭を下げた。

「……へ？」

暫しの沈黙の後、少女から間の抜けたような声が漏れた。そして、そのまま呆然としたように押し黙ってしまった。

俺が素直に謝ったのが余程、意外だったのだろう。

「確かに助太刀のつもりで言ったのだが、結果として侮辱してしまったようならば、本当に悪かったと思う。

許してもらえるか？」

とはいえ、いつまでも呆然とされて話しが進まないのは困るので、俺は真剣な面持ちで言葉を続けた。

「――謝罪は誠意を込めてする――」

相手と友好関係を築く上で、大変重要なことだ。こっちが誠意を持っていれば、言葉は足らずとも謝罪の意は相手に伝わるのだ。

言葉に頼らないコミュニケーション、俺が難民キャンプに参加した時、一番に教わったことだ。

勿論、これらは相手が子供であろうと変わらない。寧ろ、子供こそ殊更にこういったものには敏感なので、こっちが少しでも忌避感を持っていたりすると、まったく懐いてくれない。

「えっ、えつとまあ、そこまで言うならその……ゆ、許してやるよ」

少女はなにかこそばゆそうにだが、許しを出してくれた。

「そうか……よかった。  
ありがとうな」

「う、ああ、なんか調子狂うなあー。」

もう、許してやるって言ったんだから普通にしてくれよ」

俺は素直に礼を言っただけなのだが、少女は恥ずかしそうに顔を少し赤らめ、視線を合わせずにそう言ってきた。

どんな形であれ人から礼を言われると言うことに慣れていないんだろっな。

「そう言ってくれとありがたい。」

さっきみたいな口調じゃあ、こっからが本題だっていうのに、こっちもやり難くて仕方ない」

あんまりやっているとかボロが出そうだし、馴れないことはするもんじゃない。」

「え？本題？」

まだ、なんか言いたいことがあるのかよ？」

少女は先程の恥ずかしそうにする表情から一転して、再び不機嫌そうな顔をした。

そう、“本題”だ。

本来ならこんなことまでするつもりはなかったのだが、ここまできたらなにかの縁だ。それにこのまま見過ごすのもスッキリしない。まあ、この少女を見てたら放っておけなくなった、ってのもあるか。

「ああ、だから一つだけ聞いてもいいか？ いや、質問、というよりも確認に近いかな。」

お前、なんかいろいろと野菜を抱えてたけどさ、

「……どうやって手に入れたんだ？」

その瞬間、空気が変わったのを感じた。

俺が少し声色を変え、鋭い声で尋ねると少女の顔が明らかに変わった。具体的には、驚いたように元々丸い目をさらに丸くして、額にはうっすらと汗が筋を作るのが見えた。

この少女の反応を見るに十中八九、予想通りで間違えなさそうだ。

「そ、そんなの買ったに決まって「嘘だろ」っっ!!……」

少女は我に返ったように言ってくるが、それが言い切る前に俺は口を挟んだ。

さつきも言ったが、此れは“確認”だ。俺の中で答えはもうはっきりとしているのだ。

おそらく、あれは正規のルートで手に入れたような物ではない。もっと簡単にいうならば、盗品——盗んだ物だろう。

明らかに金銭など持っていないさそうな少女の身なり、籠などにもいれずに剥き出しで抱えられていた野菜、これらもその裏付けと言えるだろう。

しかし、俺が気づけた一番の理由は……

「なんで………なんで、わかったんだ」

俺に嘘と断言されたことで、言い逃れできなく思ったのだろうか、少女は俯きながら小さくもらした。風前の灯火の如きそのか細い声は先程までの元気一杯の少女とは結びつかない。

「なんで？つて言われてもな、色々と理由はあるぞ。

まあ、それでも一番の理由と云えば——雰囲気、かな」

「どういう意味だよ、それ？

そんなにあたしが、盗みをしそうな悪人に見えたのか？あたしだって、あたしだって……」

ー好きでしたわけじゃないのに……………。

悲痛そうな顔で、力なく此方を睨みながら少女は呟く。注視していなければ聞き取れなかった、最後の一文は少女の本心からの言葉なのだろう。

だったら、尚放つてはおけない。

「すまん、すまん。そういうわけじゃないんだ。」

仕事上でそういった子供は 何人も見てきたからな。お前を見た時、なんか同じ雰囲気を感じたんだよ」

そう、この少女はあまりにもにっていたのだ。俺が戦地でであった子供達に……………。

「そういった子供って……………。」

じゃあなんだ、あんたは何処かの役人かなにかなのか？」

仕事上、といった俺に対して少女はそんな邪推をしてくる。少女はもし俺が役人だったら、自分がどんな仕打ちを受けるかを考えたよついで、一層不安そうになる。

「いや、そんなんじゃないよ。」

そもそも、役人だったら宦官を騙そうなんて思わないだろ。

俺はだな……んぐと、そうだな、先生とでも呼んでくれればいい」

「そ、そうか。ふう、よかった。」

でも、先生って……。

どちらかと言えば、頭の方があんたにはぴったりだろ。そんな凶悪そうな顔してさ」

「おい、どういう意味だ？」

俺が役人でないことに心底、安堵したようでそんな軽口を返してくる。

強面だとは自覚しているが凶悪とまで言われる憶えは無いぞ。

いくらなんでも、頭かしらはないだろ。

まあ、癖で普段から少し眉間に皺を寄せて睨んでるようにも見えるが……

……話が逸れたな。

「まあ、とりあえず今、そんなことはどうでもいい。話を戻すぞ。」

あの野菜は盗んだ物なんだな？」

「!!……………う、ん」

少女はやはり後ろめたいのか、この話題を出した途端に元気をなくすが、それでも小さくだが確かに頷きを返した。

さて、次に問題となるのはこれからどうするかだが、このまま少女を役人へと引き渡すのは論外。それでは助けようとした意味がない。かといって捨てるのも論外。

だから、俺がとるべき道は……

「こ、これからあなたはどうすんだ？」

あたしを役人に引き渡すのか？」

少し考え込むようにしていた俺に、少女は耐えきれなくなったのかそんなことを尋ねてきた。

もし、俺がその気だったら自分を捕まえてしまつことはたやすい、と少女は解っているのだらう。どこか怯えているようにも見える。

これ以上黙っていても、少女を怖がらせんだけだな。それで喜ぶような趣味を生憎、俺は持ち合わせていない。

さつさと、目的を告げるとするかな。

「大丈夫だ、安心しろ。

とりあえずそんな気はないからな。

ただ、お前の家まで案内して欲しいだけだ」

「???.....!!もしかしてこのことを母さんに言うのか?

頼む!それだけは止めてくれ!

母さんには.....?母さんだけには知られたく無いんだ.....」

俺の言葉を聞いた少女は一度驚いてから頭を下げる。

先程よりも一層、血の気がひいたような顔で焦るところを見るに余程嫌なのだらう。

勿論、俺にそんなつもりはないが、盗みの理由はおそらくこれだらう。

「はあ、どうせ野菜を盗んだのもその病気で寝ている母さんのためなんだろ?」

俺がそう言つと少女の体が分かりやすいほどに揺れる。  
さっきから思うが、こいつは絶対に嘘をうまくつけない質だな。

「だったら、俺はそんな真似しねえ。」

したくない盗みまでして、母さんを助けたいと思つたお前の気持ちは正しいもんじゃないが、決して踏み躪つていいもんじゃない」

こんな小さい餓鬼が親のためになにかしたいと思つて、精一杯のことをしたんだ、方向性は間違えていてもそれはこいつが悪いんじゃない。こんな優しい餓鬼をこんなことさせるまで追い込んだ世界のせいだ。

「だったら、なんで?!」

「おいおい、さっき言っただろ、“先生だ”、つて。」

俺は医者だ。病人がいるなら何処にだっていかせてもらつ、それだけだ」

「え?、で、でもあたし金なんて持つてないし……」

「だから、そんなことはどうでもいい!

お前は、母さんを助けたいか、助けたく無いのか、どっちだ?」

最後の確認——少女にとっては答えるまでもない質問をする。

「そんなの……、助けたいに決まってるだろ!」

力強く、そしてなによりも少女の魂がこもった声があたりにこだました。

少女がそれを願うのであれば、俺がすべきことはただ一つ。

「分かった。なら 案内頼めるか」

「は、はい。こっち……です」

俺が頼むと少女は直ぐにぎごちない敬語で返事をして、家の方へと歩き出した。

そして、それに続くように俺も強く一歩を踏み出すのであった。

ところで、誰か忘れていている気がするが……、気のせいかな。









## 第十八話（後書き）

今後はもっとペースを上げて、週一、最低でも週に一度は投稿したいと思います。

今後も頑張りますのでよろしくお願いします。

感想の返信が送れてすみません、以後は気をつけます。

## 第十九話

洛陽の街の大通りから外れた街中を二人の男女が歩いていた。いや、二人で歩いていると言うのは正確に言えば違う。

男の方——まあ、つまり俺は背に先刻の少女、名をげんと嚴奴と言うらしい、を背負うようにして歩いている。

どうやら俺を追いかけ回す間に足を挫いたようで、歩き方がぎこちなくなっていたのに俺が気付き診てみると、案の定腫れ上がっていた。

そこで持っていた適当な布を水で濡らし、包帯の代わりに巻いたが、そのまま歩かせるわけにはいかないのでおんぶしているのだ。

「なあ、さつきから自分で歩けるって言ってるだろ。だから下ろしてくれよ〜」

「却下だ。そもそも、さつきまで顔を顰めて歩いてたのは誰だよ。取り合えずここは甘えておけ」

「むう〜、分かった……」

俺の背中に乗る嚴奴は気恥ずかしそうにしながら下ろしてくれと頼むがそうはいかない。いくら少し冷やしたから痛みはひいていると思つが、それは一時的なものにすぎない。ここで無理をされては悪化する可能性だって十分にあるのである。

だからここで譲るわけにはいかない。

「分かりゃあいい、お前は俺の背中道案内してればいいんだよ。

それで、ここはこの道であってるのか？」

「えっと、うん。

このまま真っ直ぐ行ってくれ」

「了解っと」

そうして俺たちは街の中心のからどんどん離れ、薄暗い路地裏を  
進んで行くのだった。

そして俺は中央に隠されたこの街の本当の姿を知ることとなるのを  
この時はまだ知る由もなかった……………

どれくらいの距離を歩いただろうか、既に随分と賑わう街中からは外れ、人々の活気ある声は全く聞こえてこない。そのせいでただでさえ、日当たりが悪く薄暗く気味の悪い路地裏が余計にそう見えてしまう。

それにここまでの道中では敵奴と話していたせいか、あまり気にならなかったがどんだん奥に進むに連れて明らかにさっきまでと違うものがある。

このあたりは空気がおかしい。  
簡単に言うならば「臭い」のだ。

それにその臭さは俺には嗅きなれたものである。  
独特で鼻の奥を刺激するようなツンとした匂い。

「……………」そう、腐敗臭だ。

そして、この場合での腐敗しているものと言えば一つしかない。

「人の死体か……………」

俺は道の脇に莫塵によって包まれたこの匂いの元凶であろうものに目を遣り、小さく呟いた。

「そつだよ……あれらは全部、都に出稼ぎにきた農民や労働のために連れてこられた奴隷達の成れの果てだよ。」

体調を崩したりした奴隷はこの辺りにゴミみたいに捨てられるんだ……」

それほど大きな声で言ったつもりはないが、背中の敵奴にはよく聞こえたようですぐに返事を返してきた。

しかし、その声に力は無く、何処か弱々しく聞こえる。

ふむ、改めて辺りをみると確かに転がっている死体らしきものは一つや二つではなく、藁の隙間から所々にはみ出して見えている色を失った腕や脚が生々しく見える。中にはまだ死んでいない者もいるのか、小さな呼吸音もどことなく聞こえてくる。しかし、それ以外に聞こえてくることなく辺りは不気味の一言に尽きる。

光るある所に影ありーつまりこれがこの街の影の姿か……。

こう言った時代の大都市になら少なからずこんな場所もあると分かっただけだが、正直これは予想以上だ。

「この辺りはどこもこんな感じなのか？」

「いや、洛陽の中でも此処は特にひどい所だと思う。」

死体がそのまま捨ててあるなんてことは洛内ではやってはいけないことだし、それに……最近では街の外の森の中とか捨てに行くことの方が多いんだ」

「おいおい、そんな状況なのに役人はなんか対策したりしてないのか？」

「はあ、役人が対策??  
そんなのするわけないだろ。」

今の役人なんてみんな自分のことばっか考える屑しかいないぞ。  
こんな汚い所に進んで関わろうとする奴なんてとっくの昔に絶滅してるよ」

殿奴は心底呆れたように返す。  
そして、その言葉の中には隠すきもない役人に対する侮蔑が込められている。

絶滅してる、か。少し言いすぎかもしれないがそんな役人なんて本当に少ないのは事実だろう。賤吏なんて呼ばれる位だしな。

まあ、ここまでひどくなるまで  
放っていたのだ、そもそも役人などに期待などしても無駄だろう。  
それにしても、

「……………随分と酷いもんだな」

「そう言う割には、やけに落ち着いてるな。」

普通の人ならもつと顔を顰めたり、嫌がるぞ」

「おいおい、医者が人の死体に対してそんなのしてたら仕事なんて出来ねえぞ。

それに……………」

「もつと酷い惨状だっっていくつも見てきたからな。？」

そう続けようとしたのだが、そこで俺は口を紡いだ。言おうとした瞬間に頭の中にある映像が浮かんできたのだ。

「『小さな小屋の中に押し込められた大勢の病人。』

「『明らかに死んでいる子供を抱いて、助けて、と何度も懇願する女性。』

「『野に打ち捨てられた子供の死体をハゲタカがよつてたかって食べる様子。』

止めとなく頭に浮かんだそれらは次から次へと流れるようにしてはゆっくり消えて行く。

なんで、今これが浮かんでくるのかねえ？  
そんな風に自嘲気味に思うも、俺はただ身を任せ、浮かぶ映像を見るのだった。

そのあと、いくつもの惨状が浮かんできたのだが、そんな中で最後に浮かんできたのはある女性の顔。

他のものに比べれば明らかに異質だが、それは他のどんなものよりもつらく、俺の心を割った。

その顔は見知らぬ顔なんかではない、寧ろ忘れたくても忘れられない顔だ。

そしてその顔に浮かべるのは綺麗な微笑み。しかし、それは同時に哀しく、今にも泣き出しそうに見える。

やめろ、

俺はお前のそんな顔なんか見たくない。

やめろ、

そんな言葉聞きたくない。

俺はただ……………

「先生、先生てば!？」

背中から敵奴の怒鳴るような声が聞こえて来る。  
耳元で思い切り叫ばれたせいか、少し頭がクラクラするのは気のせいでは無いはずだ。

どうやら、ぼうつとしていたみたいだ。

「すまん、すまん。

それで、何の用だ？」

俺は軽く右の耳を抑えながら、俺の肩口から頭を出している敵奴に尋ねた。

「もう、さっきから呼んでるのに何にも返さないし、一体どうしたんだよ!？」

ほら、その角を曲がってくれ、そうしたらすぐにあたしの家に着くからさ」

頬を膨らませながら敵奴は文句を述べて、道順の指示をしてきた。

今は感慨に耽ってる場合じゃないな。それに立ち止まってる暇なんてない。

俺は先程のことを一度、頭から外して正面に向き直る。

「了解だ、あの角を曲がればいいんだな」

「うん、だからはやくしてくれよ」

そして、もう一度、少女の家に向けて一步を踏み出し、死体が転がる道をまた進んで行くのだった。

そして、それはさらにこの街の闇の部分へと深く関わることになっていくのであった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7583o/>

---

真・恋姫無双 ～ある戦場医のお話～

2011年4月27日21時19分発行